

縄文中期社会と諏訪野遺跡

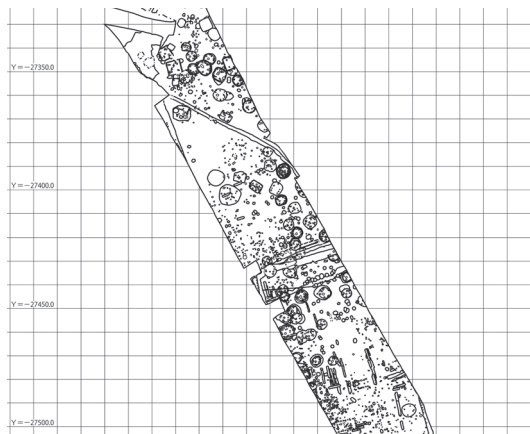
早稲田大学教授 高橋龍三郎

ただいまご紹介にあずかりました、早稲田大学の高橋龍三郎でございます。本日の内容は「縄文中期の大環状集落を探る！」という非常に大きなテーマでして、私の身には重すぎる気がいたしますが、今私が考えていることについてお話させていただきます。

「縄文考古学の課題を 10 個あげなさい」と言われた時に、縄文中期の環状集落の問題—どういう構造をしているのか、なぜ環状であるのか。環状集落がどのような役割を果たして、中期末には衰退し解体していくのはどういう理由によるものか—はトップランクに位置づけられる課題だと思います。

本日は埼玉県の遺跡を中心に、関連する千葉県資料も参照しながら、この問題をどのように理解したら良いのかお話ししたいと思います。

第 1 図は午前中に研究報告のありました諏訪野遺跡の環状集落の一部です。もちろん遺跡の全体を調査できた訳ではありませんが、集落全体の約 1/3 程度を調査して 70 軒ほどの竪穴住居が見つかっていますから、全体では優に 200 軒かそれを超える集落になるだろうと推測されます。



第 1 図 諏訪野遺跡の遺構配置



第 2 図 諏訪野遺跡の集落推定範囲

先ほど上野真由美さんの研究報告にもありましたが、もちろんこのような集落は諏訪野遺跡に限ったことではなく、集落の継続期間、あるいは始まりや終わりの時期は異なるけれども、似たような環状集落は他にも存在するということでした。

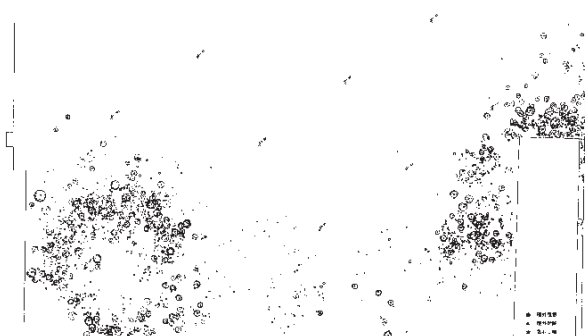
第 2 図は諏訪野遺跡の調査成果から集落の全体を推定したのですが、直径 130 m ほどのドーナツ状に竪穴住居が分布して、中央には広場があるという、これが環状集落の一般的な姿です。千葉県、神奈川県、長野県、山梨県ではこの中央部分にお墓を設ける場合もあります。

埼玉県の代表的な環状集落を見ていきましょう。本庄市古井戸・将監塚遺跡（第 3 図）は、二つの環状集落が 200 ~ 300 m 離れて近接している、全国的に見てもたいへん珍しい遺跡です。左の古井戸遺跡だけでも 100 軒近い竪穴住居が見つかっており、累積的な数値であるにせよ、この時代にしてはさぞかし大規模な人口を擁しただろうと推測できます。

ふじみ野市西ノ原遺跡でも、全面的な発掘調査ではありませんが、おそらく大環状集落になると

予想されます。

富士見市中沢遺跡（第4図）でも、中央は必ずしも空白の広場とは言い切れませんが、数十軒の竪穴住居がドーナツ状に分布する環状集落と言えます。もちろん、このような環状集落は一時期に形成されたものではなく、だいたい勝坂式終末か



第3図 本庄市古井戸・将監塚遺跡の環状集落
(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998 より)



第4図 富士見市中沢遺跡の遺構配置
(富士見市教育委員会 1999 より)



第5図 ふじみ野市東台遺跡の遺構配置
(ふじみ野市教育委員会 2008 より)

ら加曾利E3式、E4式期くらいまでという長期間に渡って構築されていることがわかっています。

ふじみ野市東台遺跡（第5図）も、部分的な調査ではありますが、現状でも100軒近く見つかり、全体を調査すればおそらく200軒あるいは300軒近い規模の大集落になるだろうことが予想されます。

日高市宿東遺跡でも、道路部分だけの調査ではありますが、竪穴住居が密集しており、復元されれば相当大規模な集落になることが予想されます。

毛呂山町新田東遺跡でも、100～200軒という大規模集落になることが予想されます。

飯能市落合上ノ台遺跡では、部分的な調査ではあるものの、60軒の竪穴住居が密集して見つかり、また、嵐山町行司免遺跡では、中央の広場に何もなくて、これを取り巻くように環状になっています。これはあたかも最初から円形というプランニングがあって、その円周上に竪穴住居が並んでいくという印象を受けます（第6図）。しかし、時期別に変遷を見てみると、必ずしも竪穴住居は円周上に並んでいる訳ではなく、勝坂1・2式期は南北二つに分かれています。勝坂3式期になると東側にかなり偏りが出てきます。さらに、加曾利E1式期になると南北二つに分かれ、時期ごとに住居のかたまりがある程度ずれてくるという見方もあります。加曾利E3式期になると東西に分かれますが、決してそれは同等ではなく、西側に分布の偏りがあることがわかっており、同じ円周上を規則的にぐるぐると回っている訳ではありません。

諏訪野遺跡から2kmほど離れた場所にある桶川市高井遺跡も部分的な発掘調査ですが、竪穴住居が数十軒見つかり、勝坂式期～加曾利E3式期にかけて構築された竪穴住居の各時期の数は一様ではなく、時期ごとに法則がある訳でもあ



第6図 嵐山町行司免遺跡の環状集落

(植木他 1987 より)

りません。

新座市池田遺跡では、勝坂・阿玉台式期から加曾利E 3式期にかけて竪穴住居が構築されています。勝坂・阿玉台式期は東西に分かれています。加曾利E 1式期になるとその間に割って入ってきます。そして加曾利E 2式期には数を減らしながら、加曾利E 3式期では西側に偏るという変遷を見せます。

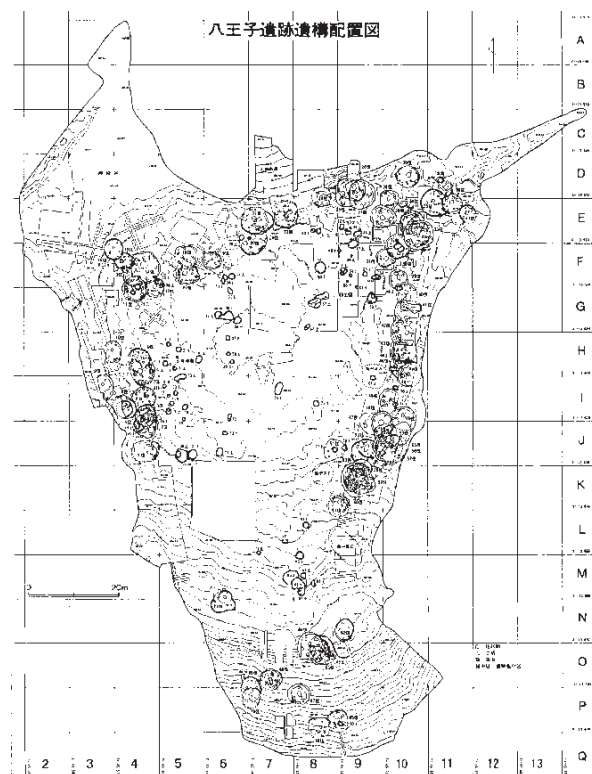
ここでの土器型式はある程度大まかなくくりです。「考古学の専門家は土器型式ばかり細分してどうするんだ」とおっしゃるかもしれませんが、土器型式は物事の時間の幅、あるいは原因・結果の順序をきちんとより正確に出すために、細かければ細かいほど良いんです。時間を測る目盛りだと思ってください。最近の「新地平編年」では従来8型式で捉えられている縄文時代中期を13群30型式に分けてより細かい編年を組み立てています。ここでの話はそこまで細かく分けて話している訳ではなく、まとめながら話していますけれども、竪穴住居の移動をつぶさに、事細かく見ていこうとすると、このような細分型式が必要になってくると思います。

飯能市八王子遺跡（第7図）は、台地の先端部に100軒近くの竪穴住居が環状に巡っている遺跡ですが、飯能市教育委員会から刊行された『掘り起こせ！地中からのメッセージ』という本の中で、飯能市教育委員会の熊澤孝之さんが斬新な研究成果を発表され竪穴住居から出土した土器型式

を非常に細かく分類し、100軒近い竪穴住居がどうやって成立し、どのような順序で建てられているか、大きく4つの時期に分けて集落の変遷を検討されています（熊澤2010）。ただ、ここで考えなければならないことは、この100軒の竪穴住居が1軒の竪穴住居の長年の移動（構築の連続）の結果として説明できるかということです。その説では、大規模な環状集落も1時期には極めて少数の竪穴住居で構成されていたということの意味しますが、皆さんはどのように感じられるでしょうか。

こうした細かな科学的な操作は非常に重要ではありますが、ひとつ問題と考えられるのは、確かに土器型式から見れば竪穴住居1軒1軒で繋がっていくのだけでも、竪穴住居がAからBへ移動した軌跡をどうやって証明するのかという問題が残ります。

大規模な環状集落の居住人員の問題は、熊澤さんの検討のように1時期1軒数人という見方があ



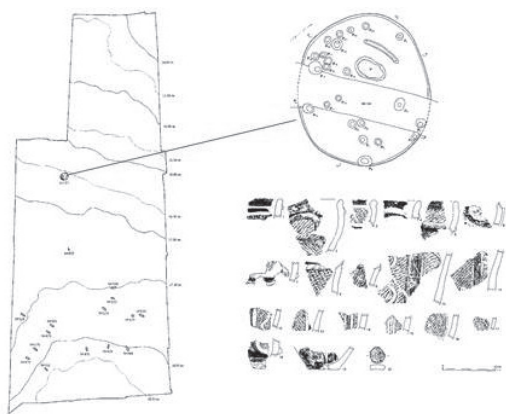
第7図 飯能市八王子遺跡の遺構配置

(熊澤 2010 より)

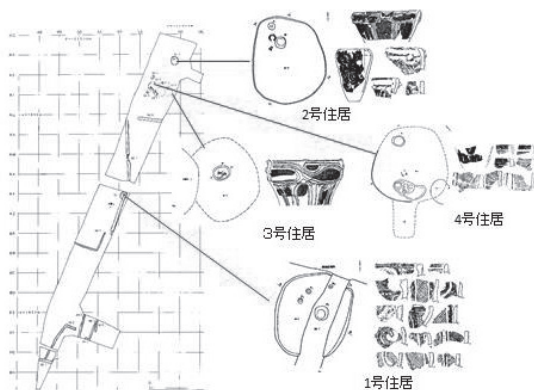
る一方で、他方では1時期に100～200人程度の人口を擁したという考えもあります。私は正解は、その半ばにあるのかなと考えています。

竪穴住居の1軒1軒の動きを捉えるのはとても重要なことですが、縄文時代中期の集落のすべてが環状集落だった訳ではありません。たとえば前原遺跡は、諏訪野遺跡と同じ桶川市にありますが、同時期の竪穴住居はたった2軒しか見つかりません。また北本市提灯山遺跡や寄居町露梨子遺跡、鴻巣市新屋敷遺跡D区（第8図）といった遺跡でも、縄文時代中期の竪穴住居は1軒から数軒しか見つかりません。

富士見市関沢遺跡の柄鏡形住居では、関東の伝統的な加曾利E式と西日本を中心とする中津式とが融合した、「関沢類型」という土器が出土していますが、こちらも1軒の竪穴住居しか見つかり



第8図 鴻巣市新屋敷遺跡D区の竪穴住居跡と遺物
(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999 より)



第9図 伊奈町向原遺跡の小規模集落
(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000 より)

ていません。

このほか、上尾市宿北V遺跡や日高市向山遺跡、伊奈町向原遺跡（第9図）のいずれでも数軒程度の竪穴住居しか見つかりません。

一般的な姿としてこれまでは大規模集落としての環状集落が注目されてきていますが、ほぼ同じ時期にも近隣や周辺にはごく小規模な集落が少なからず存在しています。

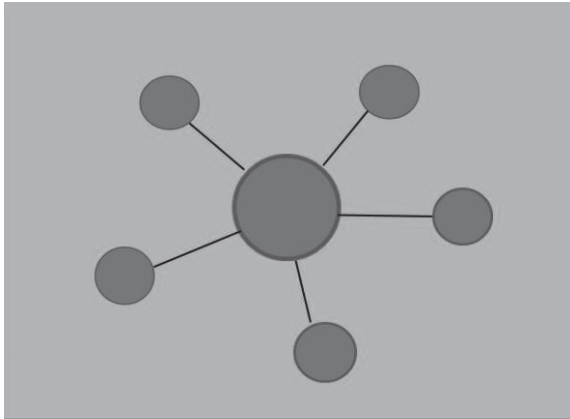
この小規模集落を作った人々は突然ここで産まれて死んでいった訳ではないでしょうから、おそらくどこかの環状集落から分かれてやってきて、しばらく経ったらまたどこかの環状集落に移動するといった動きをしたのだらうと私は考えています。

それでは、こうした小規模集落と大環状集落の関係はどうなっているのでしょうか。例えば第10図のような大環状集落を取り巻く衛星的な小規模集落と言ったモデルを考えることができますが、研究者によっては「大環状集落こそ生活や社会の基盤、拠点的な集落、言ってみれば「母村」のようなもの」と考える人もいます。

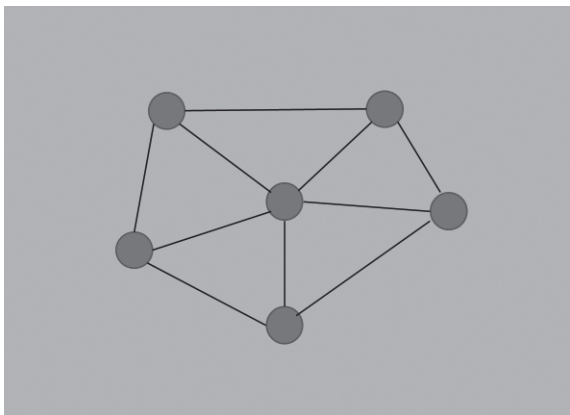
またある人は、アメリカインディアン等の狩猟採集民のひとつの戦略として一定期間2～3箇月ほど外へ出て働いて、ある程度備蓄ができたなら資源を運搬して再び集落へ戻るといった事例を参考にしながら、大環状集落を生活拠点として、タスクグループ（仕事別の集団）が一時集落を離れて、目的地で居を構え、目的が達せられたら再び生活拠点としての集落へ戻った結果だと考える人もいます（第10図）。もう一つは母村から婚出した人たちが築いた村の可能性もあります。

また、これとは別のモデルとして、同時期の住居軒数を少なく見積もり、大環状集落は拠点集落ではなく、同じような小規模の集落が社会的なネットワークを共有し合っている「均等型関連モデル」を想定している方もいます（第11図）。

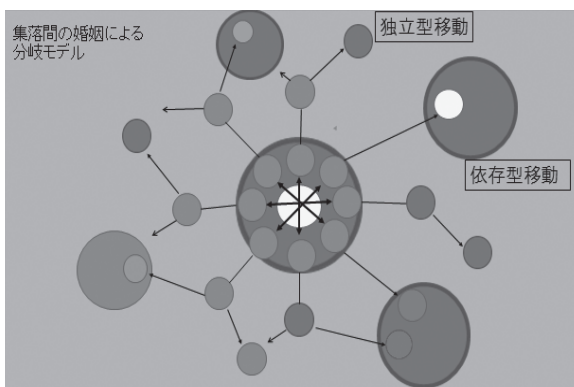
先ほど、おそらく一つの小さな単位が環状集落



第 10 図 母村と小規模集落の有機的關係



第 11 図 均等型関連モデル



第 12 図 分岐による居住移動モデル

から分岐して、同じ集落とは限りませんが、環状集落へまた編入していく、移動型の居住を考えた訳ですが、これに関する民族事例を調べましたところ、アイヌ社会を研究されている岩手大学の遠藤匡俊先生が、アイヌの社会における居住の移動には、家族全体が世帯単位で移動する場合と、家族を構成する個人が移動する場合との二つのレベルがあるということを教えてくれています（遠藤

1997）。さらに、家そのものが移動する場合でも、移動の際、事前に移動先に知らせ、友人や親、兄弟等を頼って移動する「依存型移動」と、まったく未知なる土地、あるいは既に廃村になった村へ入っていく「独立型移動」という2通りがあるとおっしゃっています。これは近世アイヌの事例ですから、縄文社会と直接に比較してはいけないうちかもしれませんが、移動の中にいくつかのレベルがあってもおかしくはない。場合によっては時代の壁を超えて共通する要素があるのかもしれませんが。特に婚姻による婚出などでは元の集落を飛び出した先で新居を構えることもあったかもしれません。

これらの集落の動向を遠藤先生のアイヌの居住移動論から眺めるとどのように見えるのでしょうか。母村たる大型環状集落から分岐した人々（婚出した人々）が独立型移動したり、依存型移動をした結果、他の環状集落へと編入していくものもあったと考えられます（第 12 図）。先ほどの研究報告でもありましたが、台地の縁辺から荒川低地部へ新たに立地の変化を伴う例もこの一つだと考えられます。このような動向は遠藤先生のアイヌ移動モデルに近いものと思われます。

金子直行さんは、大宮台地における縄文時代中期後半の集落の継続や廃絶について検討されています（第 13 図）（金子 2006）。これによれば、加曾利 E 2 式新・E 3 式古段階では廃絶や継続する集落もありますが、新たに 27 遺跡が発生しています。継続する遺跡は 16 遺跡ですから、新しい土地へ出て行くことが多かったことを示しています。

そして加曾利 E 3 式新段階では、継続する遺跡は 24 遺跡であるのに対して、新規の遺跡は 38 遺跡も存在しているといえます。

先ほど見ました諏訪野遺跡では加曾利 E 2 式の古段階に集落形成が終わっていましたが、その人々がどうなったかはわからないけれども、大宮

台地全体を見ると、新しい土地へ進出している傾向が窺えます。そうしたときに、廃絶した集落では人々が絶滅したと見るよりも、おそらくは居住を中断してどこかへ分散していったのであろうと見る方が良いと思います。アイヌ社会の居住移動と同じレベルの移動が頻繁に起こっていた可能性が高いのではないのでしょうか。

さらに加曾利E 4 式期を見ると、それ以前からの集落を継続させる遺跡と同じくらい、新しい土地で居住を開始する遺跡が多いようです。

これはいったいどういった理由によるものかと言いますと、我々は矛盾したことを考えようとしているのですが、遺跡の規模は少し小さくなった気がするのだけれども、遺跡数や住居軒数をきちんと分析していくと、縄文中期という時代は、ほかのどの時期よりも集落数が多く、また1集落あたりの住居軒数も多いんです。仮に1軒当たりに住居人員を5人として見ても、1集落あたりで数百人という大きな数字が算出されてしまう訳で

す。だから仮にそれが同時期でなく、時期が細かく分かれるにしても1時期に100人くらいいてもおかしくはないね、という数字が出てくる訳です。

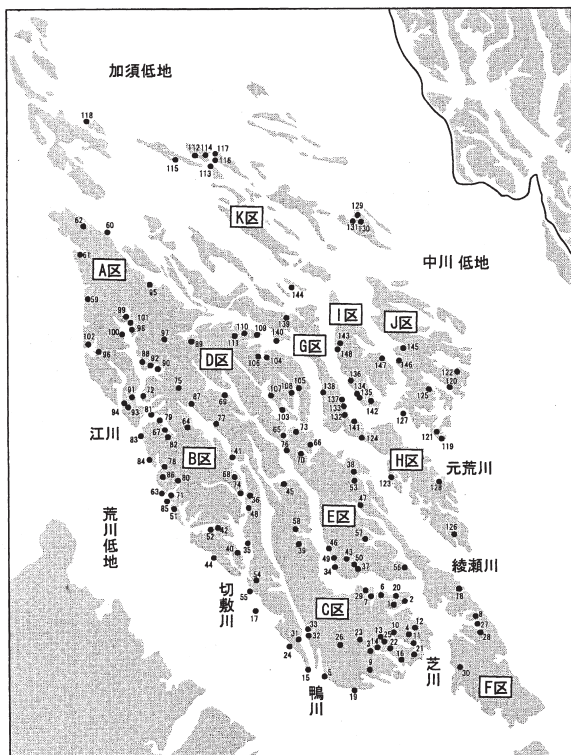
縄文時代の人口を算出した小山修三さんの研究によれば、そのピークが縄文中期に来ていることがわかっていますが、その程度が尋常ではないんです。他の時期の数倍～十倍くらい増え、後期になるとこれが減りまたもとに戻る、というよりそれより減ってしまいます（小山 1984）。一気に増加した時に狩猟採集をやめて農耕へ走ったんじゃないかという多くの議論は、中期の人口論から出てくる訳です。

一般的に狩猟採集民は比較的人口密度が低く、人口密度1km四方辺り0.1～0.5人と言われています。ところが縄文中期のピーク時では1km四方辺り2.9人という数値が出ていまして、先程の一般的な狩猟採集民の数値と比べると相当に高いんですね。

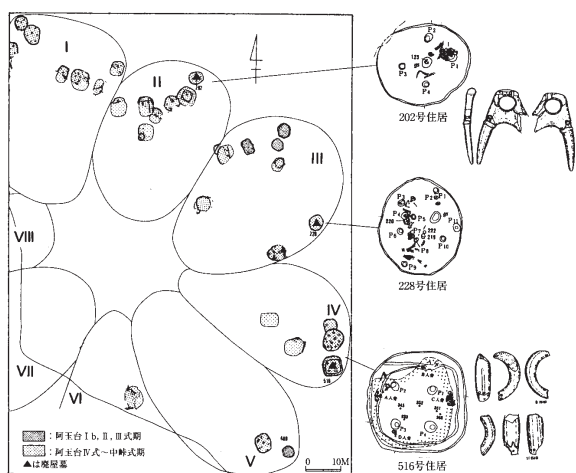
狩猟採集民の生態を多角的に研究して見ますと、その地域の人口支持力、食糧と言い換えてもいいですけど、通年住み続けても1年間暮らしていけるだけの食糧があるという算段のもと、その土地で生きていく場合が多い訳です。するとピークが一気に10倍くらい跳ね上がる縄文中期という時期は、特別に環境が良くて一気に10倍くらい増加した人口を支えるだけの格好の環境がやってきたと理解するしかないのですが、ただ縄文後期になると一気に減ってしまう訳ですよ。

そうならないように、狩猟採集民は人口支持力よりも実際の人口が上回らないよう調整します。ですから人口が一気に上がったり下がったりということは理論的にはあまり無いんですね。縄文中期の異常に高いピークをどう理解したら良いか、多くの研究者が頭を悩ませている訳です。

確かに発見される遺跡数、住居軒数は他の時期を圧倒しています。これを矛盾なく理解できる考



第13図 大宮台地中期後半の遺跡分布
(金子 2006 より)



第 14 図 市原市草刈貝塚の環状集落と
ブロック別配列（高橋 1991 より）

え方があるかどうか、次に見ていきます。

私は 20 年ほど前に、千葉縣市原市の草刈貝塚を分析したことがありました（高橋 1991・2007）。時期的には勝坂式とか阿玉台 4 式から加曾利 E 4 式くらいまでの比較的長期間継続する集落でして、200 軒を超える大型集落です。竪穴住居がドーナツ状に分布し、その内側は小竪穴があり、中央には広場を持っています。竪穴住居は激しく重複を繰り返しながらも移動していました。遺構の間に若干の空白域があることに気づきまして、これが縄文時代の社会的な関係を示すものだろうという仮定の下に、I～Ⅷとした 8 つの「ブロック」に括ってみました（第 14 図）。

ちなみに第 14 図中の▲印は人骨の出土した竪穴住居です。貝塚の貝が提供してくれるカルシウム成分のおかげで人骨が溶けずに残った訳ですが、貝塚の多い千葉県はそういったありがたい集落がある訳です。

そこで、この草刈貝塚を時期ごとに区切ってみました。古い時期は阿玉台 1a～1b 式期くらいなのですがこの後に続きません。阿玉台 4 式くらいから中峠式段階、そして加曾利 E 式からは続くのですが、どうやらこのブロックは古い時期から分かれていそうです。そこで大事なのは各ブロックの一番外側には、多数の人骨を出土する住居（廃

屋墓）が位置していることです。

次の加曾利 E 1 式期でもブロックごとに分かれそうですが、どのブロックにも人骨を出土する住居が存在しています。

台湾の部族の中には家の床下に穴を掘って遺体を埋めて遺族もそこに住むというルカイ族の事例もありますし、インドネシアではお棺を家の中に持ちこんだまま、数年間そこに住まうという事例もあります。中期の廃屋葬で出ている人骨は床面直上のものから、床面から若干浮いているものもありまして、時期的にいつ埋葬したのかについては、必ずしも一様ではなく、追葬を考えるべきかもしれません。

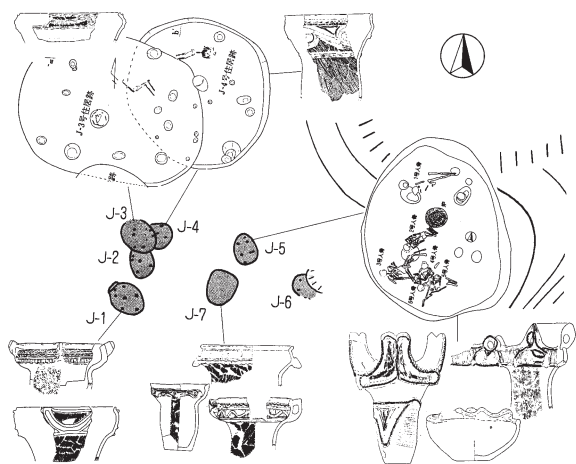
次に加曾利 E 3 式期ですが、居住域は中心に向かって（求心的に）移動してきています。

さて 200 軒を超える集落が、1 軒の居住人員を 5 人だとして、仮に 2～3 時期に分かれるにしても累計で 1000 人くらいが住んだとする考え方はどうも怪しいと疑いをもっています。

ある住居が廃棄され、新築するから見かけ上の竪穴住居が増えるのであって、結果的に 200 軒、300 軒の住居がどうやって更新されていくかのメカニズムがわかれば、一時期の集落の人数を捉えるのは難しいことではないと思う訳です。

ここで一度草刈貝塚を離れ、同じ千葉県は鎌ヶ谷市の根郷貝塚（第 15 図）に目を向けたいと思います。縄文中期中頃の遺跡です。土器型式で言うと阿玉台 4 式から中峠式くらい。さらに加曾利 E 1 式の一番古い部分ですね。これが竪穴住居 J-1、J-2、J-3、J-4、J-5、J-6、J-7 と 7 軒出ているのです。そのうちで、J-3 と J-4 住居ですが、ここには恐らく加曾利 E 1 式かと思われる、人骨が床面から出ているのです。恐らくここで亡くなった方がここに埋められているのですね。単体埋葬です。

J-4 住居はすぐ隣（J-3 住居）に切られていますから J-4 住居の方が古いのですが、この J-4 住



第 15 図 根郷貝塚の中期中葉の住居と廃屋葬
(大塚 1995 より高橋作成)

居にも人骨があるのですよ。他にも人骨が出ているのは J-1 住居、J-7 住居です。これは中峠式の新しい部分で加曾利 E 1 式の一番古い段階だと思うのですが、これから加曾利 E 式に代わる直前段階です。ここに人骨が一体出ています。他には出ていません。ところが J-5 住居という住居を見て下さい。1 軒の住居に全部で 6 体の遺体があります。

人が亡くなってそれを竪穴住居に埋める事、これを「廃屋葬」といい、墓を「廃屋墓」といいます。恐らく、人が亡くなったところに遺族は一緒に住めないというので、そこを死者の家と定め死者を順次埋葬する施設です。死者が発生する都度、追葬的に埋葬する家だった可能性があります。

何故かというこの時期に廃絶された住居を見て下さい。J-1、J-2、J-3、J-4、J-5 住居と 5 軒ありますが、この J-5 住居で発見された遺体は 6 体です。つまり、その時期に廃絶された住居の数とこの J5 住居（廃屋墓）に埋められた人骨の数がほぼ一対一になる。これ皆さんどういうことか分かりますよね。

一人死んだら遺族はすぐ近くに住居を新築して移動し、遺体は決められた 1 軒の家、J-5 住居の竪穴住居の中に埋める。またしばらくして死者が発生すると遺族は隣に竪穴住居を新築し移り住み

遺体を J-5 住居に追葬する、また一人亡くなるとその人をまた決められた 1 軒 (J-5 住居) に追葬し埋葬する。その都度遺族は新しい家を作る。このようなメカニズムで新住居が更新されるとすれば、一人死ぬ毎に新しい住居が 1 軒更新されることになる。そうすると、見かけ上この 4 軒、5 軒の住居には全体で恐らく 30 人、40 人住んだだろうと考えがちですが、でもそうではなくて一人死ぬ毎に 1 軒ずつ新築住居が作られるということになります。そう考えると、1 時期の集落といえますか人口はそんなに多くなくてもいい訳です。

亡くなった人の数と発掘された住居の数がほぼ一対一になっている。つまりこの J-5 住居は沢山の遺体を収容するための決められた廃屋墓です。中峠式にかなり特徴的に出てくるのですが、たくさんの遺体があるので私は「多遺体埋葬」の廃屋墓のような言い方をしているのですが、これは加曾利 E 1 式以降になりますとシステムが変わってきます。一人亡くなったら、亡くなった人をその住居に埋めて、遺族はすぐに隣に移動して、また亡くなったらその住居に埋めて、ということをやっていきますね。

加曾利 E 1 式以降では、1 軒の決められた「死者の家」に数体の遺体を収容するようなことはありません。1 軒に遺体を埋めたら、またすぐ近くに移動して、次に死者が発生したらその死者はその住居に埋めてまた移動するという風にやるので、竪穴住居 1 軒につき一人しか埋められていない。死者の発生と住居の新築に関して一定のこのシステムがあるのですが、しかし死者の数と新築

第 1 表 根郷貝塚廃屋葬遺体の属性

根郷貝塚人骨の属性					
住居番号	人骨番号	性別	年齢	頭位方向	土器型式
J-5 号住居	1 号人骨	男性	壮年	西	阿玉台Ⅳ
	2 号人骨	女性	壮年期前半	南西	
	3 号人骨	男性	熟年	西	
	4 号人骨	女性	熟年	北	
	5 号人骨	女性	熟年	東	
	6 号人骨	男性	壮年	西	
J-4 号住居	7 号人骨	男性	青年	東	中峠
J-3 号住居	8 号人骨	男性	壮年		加曾利 E 1

(森本他 1995 より高橋作成)

される住居の数の比率が一对一であることは時代が変わっても変わらない訳ですね。

今度は遺体の属性を調べてみましょう。根郷貝塚では J-5 住居が多遺体を収容する廃屋墓なのですが、すでに聖マリアンナ大学の森本岩太郎先生が全部きちんと整理してくれました。1 号から 6 号まで 6 人の遺体があって、性別は男性とか女性とか全部表示されております。例えば 1 号人骨と名付けた人骨は男性ですね。いつ頃亡くなったかという「壮年」だと。頭位方向は西向きだと表示されています。こういった属性を全部書いてくれているので、そこを抜き出して私が表示したのが第 1 表ですが、かつてこのような 1 軒の住居にたくさんの遺体が出た場合、恐らくこれは同時埋葬であろうということで、一家は地震に合って屋根がつぶれて圧死したのだとか、あるいはみんなフグ中毒で一家殲滅の憂き目に合ったとかそういう風に考えがちだったのです。ある遺跡の竪穴住居では、その遺体を調べたら、あたかも不慮の事故のため苦痛でもがき苦しみ指が立っていたと。口も半開きでもがき苦しんでいるようすがあるので、恐らく牡蠣に当たって死んだか、フグ中毒で死んだかということがまことしやかに語られました。それを分析すれば同時期の家族構成が分かるだろう、と研究者も真剣に考えました。

私は、どうも違うぞと疑をもち草刈貝塚を調べたところ、頭の方、つまり頭位方向がヒントになりました（第 2 表）。根郷貝塚でもそうなのですが、1 号は男性で西頭位でしょう。2 号は女性で南西。3 号は男性で西。4 号は女性で北なのです。5 号は女性で東。まあ 6 号は男性で西っていう風に、性別によって明確に分かれてくるものがあるって、草刈貝塚ではもっとはっきり出ました（第 2 表）。草刈貝塚では、だいたい女性の頭位方向は北方向中心です。6 体ぐらい検出されているのですが、5 例は北を向いています。男性で北を向いているのはほとんどないのですよ。男性はどっ

第 2 表 草刈貝塚遺体埋葬の廃屋葬墓

草刈貝塚の多遺体埋葬の廃屋墓						
小群	住居と人骨No	性別	年齢	床・覆土の別	頭位	土器型式
I						
II	202号住居					
	A	男	成人	床	東	阿玉台Ⅳ—中峠
	B	不明	5～6歳	床	東	
	C	男	成人	床		
	D	女	成人	床		
	E	男	成人	覆土		
	F	不明	若年	覆土		
III	228号住居					
	A	男	熟年		東南東	阿玉台Ⅳ—中峠
	B	不明	乳幼児			
	C	女	成人		北	
	D	女	熟年		北北東	
	E	不明	5～6歳			
	F	女	熟年			
IV	516号住居					
	A	男	成人	床	南	阿玉台Ⅳ—中峠
	B	男	熟年	床	西	
	C	男	成人	床	北北東	
	D	不明	8歳前後		西	
	E	男?	成人			
	F	女?	青年			
	G	不明	若年			
V						

ちを向いているかというと、東西軸です。特に多いのは東なのですね。だから、性別区分で頭位方向をどちらに向けるか。頭位方向は明らかに遺族が整えてやる事なのですね。フグ中毒で死んだ時は、女性は決まって北を向いて死ぬのだとか、男性は西を向いて死ぬとかそういう法則があればいいのですが、多分そういうことはありません。

亡くなった人の遺体をどうやって決められた方向に向けるかは、亡くなった人の遺族がそれを処置してやった証拠で、自然の災害で突然死したとかそういうものではありません。むしろ、亡くなった後に遺族がきちんと一人一人遺体を処理しているところを見ると、恐らくそれは突然の悲劇的な死ではなくて通常の死でもそういうことをやったのだと判ります。従って、これはもう竪穴住居が廃絶されるという、その軒数に等しい数の死者が発生したということだから、死亡時期はそれぞれ別だろう。先ほどの根郷遺跡 J-5 住居の場合は、別々に死亡した死者がその都度、追葬的に埋葬されている訳です。そうすると追葬が可能なのは何かと言うと、存続性のある決められた一軒の家、すなわち「死者の家」のような施設が、場合によっ

ては外見がボロボロになりながら、長期間存立していたということですね。

ちょっと戻りますが、草刈貝塚の、例えば第Ⅱブロックでは、202号住居というのが「死者の家」なのです。ここに6体の遺体が埋められていました。この時期に廃絶された住居を数えてみると6軒です。第Ⅲブロックでは、そこに228号住居という廃屋墓があって、ここにやはり6人埋められています。第Ⅳブロックには516号住居という廃屋墓があって、そこには7体が埋められているのです。

若干、竪穴住居の型式が違うのですが、いずれのブロックも廃絶された住居の数と廃屋墓に埋められた人骨の数がほぼ一致する。ピッタリではないのですが、ほぼ一致するというのはやはり一人亡くなったら1軒の住居を廃絶して、遺族は近くに新しい住居を造ってそこに移動する。そうこうしている間にまた死者が発生したら、その住居を廃絶して近くに新築するというメカニズムであるならば、この遺体の数と廃絶された住居の数がほぼ一致するということも説明できるわけです。

一つ面白いのは各ブロックの一番外側にそのような「死者の家」が造られているということです。みんな住居の柱の位置を避けるように遺体が配置されています。恐らく柱穴と重なるのは1例もありません。だから当時遺体が埋められるときに当然柱が立っていた、上屋が存立していたということなのですね。

ちょっとこの属性を探して見ましょう。例えば第Ⅱブロックの202号住居、人骨の属性を見えます。人骨が6体あるのでA、B、C、D、E、Fと番号を振り、性別を見ると、男性、不明、男性、女性、男性、不明となります。この202号で出てきた性別を比率で見ると、男性が3で女性が1です。不明はこの際、分からないのでカウントしません。それを見ると女性は排除しないものの男性が圧倒的に多いです。隣のⅢブロックの228

号住居を見て下さい。同じように6体人骨が出ているのだけど、性別を見ると、男性、不明、女性、女性、不明、女性とあります。不明もあるけれど、そして男性が1体入っているけれど、マジョリティは女性である。またすぐ隣の第Ⅳブロックの516号住居を見てみましょう。ここには7体出ています。A、B、C、D、E、F、Gですね。その性別を見ると、男性、男性、男性、不明、男性、女性、不明となります。女性も少数参画しているのですが、ここではマジョリティは男性です。

これらの人骨データは専門家が鑑定しているのですが、その専門家の先生でも不明例があるのです。この第Ⅳブロックの516号住居の人骨は、女性も排除しないけれども、圧倒的に男性が多いですね。これで何が言えるかというと、各ブロック毎に、これは男性中心、隣のブロックでは今度は女性を中心、また隣では今度は男性を中心、という風に、男性と女性の割合が逆転しているわけです。1ブロックごとに反転しているんですね。まあ集落全体でブロックは8つくらいに分かれそうなので、全ブロックに廃屋墓が出てくればありがたいのだけれども。この限られたデータをどうやって理解するか、ということが問題です。

先ほど言いましたように、廃屋墓に男性は頭位方向を東西方向に向けます。女性は北中心です。遺族がきちんと男女の性別に則して遺体の処理をして、その結果がこのように出たと解釈するわけですが、そうすると短期間の割には、結構、たくさんの遺体が収納されているということになりますね。竪穴住居がその都度更新されて、古いものが廃絶されているわけですから、その中で、埋葬場所がこの竪穴住居1軒に集約されるわけです。

そこで亡くなった人はすべて廃屋墓に入れたのかと言うと、これについて私は疑問を抱いています。ひょっとしたら、世帯の長のような人が亡く

なった時はそういう処理をするのではないかと。というのも、202 号住居では、鹿角製腰飾り、これ鹿の角でたいへん固い材質ですが、これに彫刻し穴を開けて、それを腰飾りにしたものです。これを作るのに大変手間暇かかるのですが、しかし出来たものは非常に美しいのです。関東地方ではだいたい、中期あたりにこのような鹿角製腰飾りを持った人骨、まさに腰近辺から出るのですよ。この 202 号住居の男性の腰からこういった腰飾りが発見されました。重要なのは、そういった人が一人ならず、この竪穴住居から 2 点出ています（註 1）。鹿角製腰飾りはこの集落の全員が持てる物じゃありません。恐らくこの草刈貝塚の集落でも、鹿角製腰飾りはこの 2 点しかないのです。何らかの意味でこの人はこういった鹿角製腰飾りを持てる、そういったランクにあった人物だということです。これを位階といいます。階級が出来上がっていたという訳ではありません。むしろその位階の基盤が血縁にあると私は考えています。それを持つ男は、その村の代表（地縁的代表者）なのかと考えがちなのですが、ちょっと私は違います。血縁関係の代表だろうと思っていますが、これについては後ほどお話をします。

この竪穴住居では二人が鹿角製腰飾りを保持しています（註 1）。例えば親父さんが持っていて、さらにその息子さんがやはり同じような鹿角製腰飾りを持っていて、二人とも佩用を許されていたとすれば世襲的なのですがどうでしょうか。短期間のうちで、役割が継承されているということが大事なのです（註 2）。だから腰飾りは決して、男のお洒落だとかじゃありません。ある意味では、血縁の代表という意味で、その人物だから佩用が許されるという、威信財です。威信財とは、例えば古代エジプトのファラオの様に、杖と殻（から）竿（ざお）を胸前で交差させて、これは王の象徴的ポーズです。それらはレガリアと言って威信財です。それを持っている事が、村中の人々がそれを

承認して、外部の人がそれを見たら、あ、この人は違うのだということが分かるように、といったレベルの話です。

それと同じことが、第Ⅳブロックの 516 号住居でもありました。何があったかと言うと、図に載せておきましたがこれはイノシシの牙です。エナメル質の部分と根本の部分に穴を開けて、2 個あわせて紐で結ぶのです。ブレスレット、腕輪なのです。イノシシの牙のブレスレットってそんなにキレイとは思わないのですけれど、ただこれは美的な装飾物ではなくて、社会的に特別の意味を持つもので、どの人も着用したというものではありません。イノシシの牙で作ったブレスレットっていうのはそんなに多くは出土しません。草刈集落では 516 号住居からまとまって出土しています。一つのステータスないし位階の表示装置、レガリアですね。

では第 2 表を見て下さい。202 号住居といい 516 号住居といい、基本的に男性がマジョリティを占める廃屋墓です。女性を中心を占める 218 号住居から何か出土したかと言うと、実は何も出ていないですよ。だから、もしそれらが装飾品だったら女性の方からもいっぱい出てもよさそうなものなのだけど、事実は逆です。男性が着けていて、女性は何も佩用していない。だから装飾的な目的で着けているのではないことがわかります。むしろ何らかの社会的カテゴリーの代表であると。例えば、村長とか環状集落の代表と捉えれば、地縁的な捉え方です。ところがそうではなくて、何やら血縁的な代表者の可能性もあるのです。これは後に説明しますが、結論は血縁関係だと思っています。特に重要なのは、腕輪がイノシシの牙で出来ているということ。これキーワードで覚えておいてください。イノシシです。

では他方の 202 号住居の腰飾りは何か。これだけ見てイメージするのは難しいのですが、似た形状の鹿角製腰飾りは、縄文時代の後期から晩期

にかけても出ます。しかも関東地方だけでなく、西は東海地方まで行きますし、北は東北地方まで行きます。昔、松本彦七郎という著名な東北帝国大学の教授が、これはトリ（鳥）だと言っています。主に形状から判断して言っているのですね。その分野に大変詳しい春成秀爾先生も、トリだと言っています。私もトリだと思っています。先の尖った方を嘴に見立てて置き直して側面から見ると、透かしの部分がトリの目の部分に相当するのではないかと。皆さんも「うーん、そう言われればそう見えるけれど…」といわれるかもしれません。話半分だな、と思われるに違いありません。これについては後程述べますが、キーワードとしてトリとイノシシを覚えておいて下さい。

要するに何が言いたいかというと、環状集落で、しかも 200 軒を超す大規模な集落にはさぞかしたくさんの人が住んでいただろうという解釈が一方にあって、他方には、たった 1 軒の住居の移動だけでその説明がついちゃうのだよと言う解釈があります。そのすごく大きな振れ幅の中でこれから縄文集落を理解しなくてはならない。私はこういった死者が発生する度に竪穴住居を 1 軒ずつ更新していくというメカニズムが働くのであれば、住居は死者の発生に合わせて住居が更新されていくのだから、沢山の住居が構築されたのは自然の成り行きであって、たくさんの人が居住していなくても成立すると考えております。

今私は中峠式の時期を分析しましたが、これ以後、加曾利 E 1 式から葬法が変わり、E 2、E 3 式以降まで 1 軒の廃屋墓にたくさんの遺体を埋葬する方式は無くなります。多遺体埋葬の廃屋墓がなくなり、1 軒に 1 体くらい埋葬する方式が中期末まで続きます。ということは、多遺体と少遺体の人数の違いはありますが、双方ともにメカニズムは同じなんですね。一人死んだら 1 軒の住居を廃絶してそこに遺体を埋葬し、隣に新住居を築いてそこで生活を再開する。そうこうしている間に、

また一人亡くなったら、またその家を廃屋にして死者を埋めて近くに移動する。というようなことを、各ブロック単位でやっている可能性があるのです。ただし、加曾利 E 1 式以降は上屋は解体して遺体だけを単体で埋葬します。

つまり、同じようなことをブロック単位でやっている。何故それが言えるのかというと、それぞれのブロックごとに廃屋墓が別個に造られているじゃないですか。各ブロックは個別の集団の先祖代々のテリトリーであって、そこに埋められている先祖たちの所有地ですよ。自分たちの隣には隣のブロックのお墓があって、隣に違う集団の先祖たちが眠っているのです。そうすると、私があえて線で括ったブロックと言うのは、その集団に属する世帯の居住のためのテリトリーである、という風に考えることが出来ます。そうすると隣には隣の人たちが住んでいるわけだから、あるブロックに住んでいる人たちが、自分の場所が嫌になったからといって、勝手に越境して隣に行ってみようと思っても行けない。何故かということ、隣にはすでに住んでいる隣集団がいるからです。無理に越境しようすると、自分の家があるだろうと、そっちに戻れよと叱られるのが落ちです。

そうすると、環状集落の中に複数の集団が数個のブロックに分かれて存在し、各ブロックの中で一つの集団がずっと住み続けていたと考えることができます。そうすると、ブロックによって区切られたテリトリーの中で、1、2 世帯の家族が世代を継いで居住を繰り返しながら住み続けることがあり得たわけで、居住にその痕跡が残されているわけですね。その契機が人の死と廃屋墓への転化です。そうすると、1 個のブロックとはどのようなものかということ、1 世帯ないし 2 世帯が長期の生存を繰り返す中で出来てきた可能性がある。これは先ほど八王子遺跡のことで熊澤さんの説を紹介しましたが、少数の住居の移動によって説明し得るという点では熊澤さんと近い内容です。出

土住居がたくさんあったというのは、そのメカニズムで説明すると、多数の死者の発生と関係して多数の住居が廃絶されたことを示すに過ぎません。例えば 100 軒の竪穴住居が発見されたから大集落だと思ったら、いや、100 人が死んだだけだ、ということになりますね。

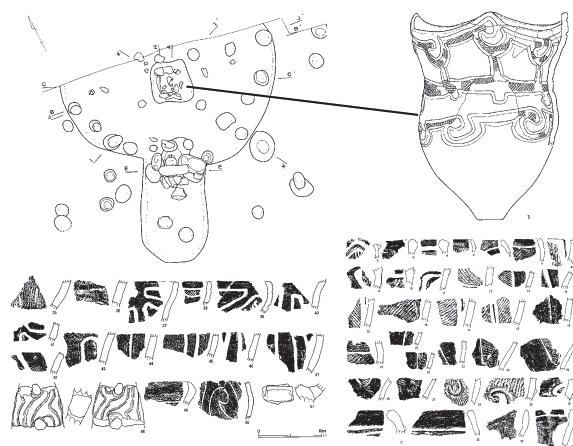
熊澤さんと違うのは、私は各ブロック単位で住居の移動が起こっていると想定する点です。だから、1 ブロックで 1 軒、多くて 2 軒。集落全体で 8 ブロックあるので、1 軒当たり 5 名の世帯員として、恐らく $8 \times 5 = 40$ 人、あるいは 50 人程度が集落の一時期の規模ではないかと考えるわけです。これを超えるような、例えば 100 人を超える規模なのかについては、ちょっと私は懐疑的です。縄文中期にたくさんの竪穴住居が出土するといっても、これは本当は見かけの数であって、実際はそれほど多くの人口を想定しなくてもいいのかもしれない。その集落の中から人が出たり入ったりという移動をやっていると考えると、たちどころに遺跡数、住居跡数も増えるだろうと考えています。中期の人口が異常に多く見える理由はここにあるのではないのでしょうか。今は一つの仮説として提示しておきたいと思っています。

しかし、それでは次の段階で何故集落は変わったのかと、どうしてある意味でフレキシブルな柔軟性のあるシステムに変わったのか。大規模な環状集落は中期の最終末になると、途中で解体してしまい、集落の数が減ってしまうと同時に、一つ当たりの集落も分散的な小規模集落に変わります。これについて考えなくてはいけないのはいくつかの社会的要素です。一つは、居住システムがどのように変わったかということと、集落の成員がどのような変化を遂げたか、そしてまた精神世界を含む社会がどのようにして変わったか、ということです。これを追うためには、中期の環状集落だけを分析していてもなかなか結論が出ません。むしろ大切なのは後期の集落がどういう形で

営まれているのかということが分かれば、中期社会がどの様にして変化して、やがて後期に至ったのか、言うなれば結論みたいなものですね。それを見ればだいたいどの様な変化を目指したのか、どういう方向を見た変化なのか見えてくるのです。

埼玉県における後期初頭の集落が、どういう集落かをちょっと見てみましょう。飯能市の上町東遺跡では、中期の最終末から後期の初頭のものまで出ています。ここで 6 軒くらい出ているのですが、例えば、この集落で一番古い段階ですね。炉体土器が 4 個体出ています。それがどうだったかというと、西日本系の中津式の鉢が出てきて、称名寺式と加曾利 E 系統の後期土器が共存しているといわれております（第 16 図）。中津式が炉体土器に使われることも大きな問題ですが、共伴関係でみると後期初頭に位置づけられます。称名寺式が共伴するようです。上町東遺跡では、称名寺式の新しい段階の土器がやはり出ているかと思います。

埼玉県でこういう例はいくつかあるようですが、やはり同時期にあるのは 1 軒か 2 軒の小規模集落です。だから加曾利 E 4 式の段階で、環状集落が全面的に解体するのは、まず間違いありません。今まであったものが分散してどこかに行くか、

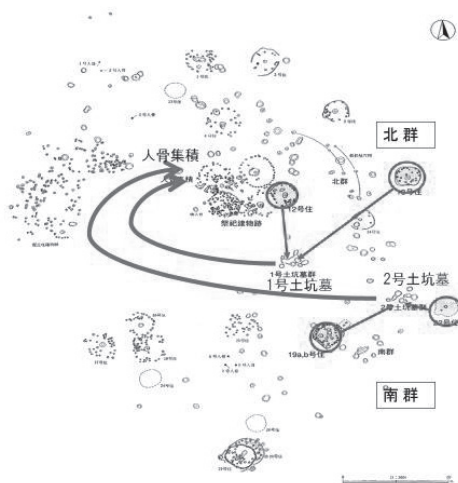


第 16 図 飯能市上町東遺跡の竪穴住居跡と遺物
(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006 より)

分散してどこか新しい集落に参入して行く良い例かと思います。

似たようなことは他の県でも起こっています。一つ参考例となるのは、千葉縣市川市権現原貝塚の事例です（第 17 図）。これは貝塚が守ってくれたお陰で、多く人骨が出ているのですが、概要をちょっと紹介したいと思います。この遺跡に一番最初に人が来たのは、北側の 2 軒です。これは加曾利 E 4 式の段階です。住居は南にも 2 軒あって、これも加曾利 E 4 式の段階。ですから近隣の環状集落が解体してですね、そこからやって来たのですよ、新しい台地に。この人たちが最初に集落を始めた。渡辺新氏にならってこの北の方にあるのを北群と言います。こっちは南にあるので南群と言います。

この調査を実施した渡辺さんが、単独で非常に緻密に調査を積み重ねていって、この北群と南群がいったいどういう関係かということ突き詰めています（渡辺 1995）。最初の人たちは同時に出現しており、一緒に申し合わせたように同時に来ています。ただし、この人たちは、お互いに血縁関係はなかったらしく、それぞれ別個に墓を造営しています。北群は 1 号土坑墓に、南群は 2 号土坑墓にお墓を造ったのです（第 17 図）。今までの様に、家を廃屋墓にして遺体を埋葬する、と言う慣習は無くなっております。廃屋墓はやめて、土坑墓に変わってしまいます。ここに 10 数個の土坑墓があって、10 数人の遺体が埋葬されました。どうやら北群の人たちが、居住中に亡くなったならここに遺体を埋めるというシステムだったらしい。一方南群の人たちは、ここに 2 号土坑墓というのがあって、やはり同じように 10 数個の土坑があります。亡くなったなら遺体をここに埋めていくという、北群と同じことをやっています。これについてどのように理解するかというと、北群と南群ではお墓が別々に設営されているので、双方が一緒にお墓を共有しない関係、血縁関係は



第 17 図 権現原貝塚における再葬墓
(渡辺 1991 より高橋作成)

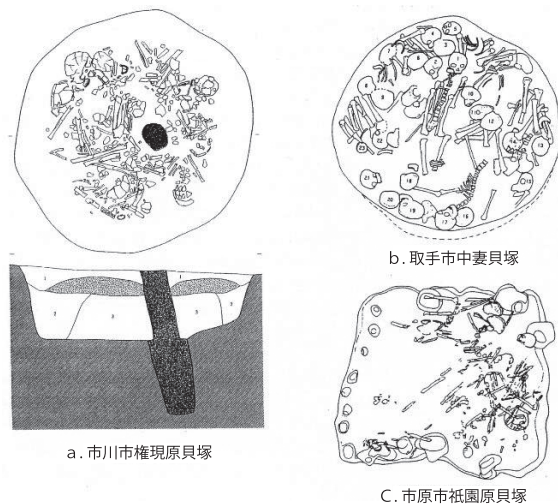
ありませんよということなのです。

ところが、この 1 世代 2 世代あとの末裔たちが大変驚くべきことをやります。何をやったかというと、この 1 号土坑群と 2 号土坑群とを掘り返したのです。

1 号土坑群を掘って、2 号土坑群も掘って先祖の骨を掘り出し、一箇所に集め直します。第 17 図に「人骨集積」とあります。この土坑は直径 1 m 50cm くらいの物なのですが、そこに全部埋め直しているのですね。つまり、この 1 号土坑群に遺体を埋葬された人たちは、恐らく先祖はこの北群に生活した人たちです。同じく 2 号土坑群に遺体を供給したのは、南群に生活した人たちですね。

わざわざ別個にお墓を造ったのを、その末裔たちは、それぞれ掘り返してその人骨集積に持って行って、あたかも同じ血縁者のように一緒に再葬しているのです。おかしいことをやりますね。恐らく数代にわたる通婚の結果、もはや同じ血縁に収斂したのではないのでしょうか。

権現原貝塚の集落では、この 1 m 50cm くらいの集積土坑に 30 数体の遺体が再葬されています。関東地方ではこの時期、だいたい堀之内 1 式か 2 式くらいなのですが、たくさんの遺体を一つの土坑に埋め直す。一回掘り返した先祖骨をもう 1 回再葬し直す。なぜそんなことが分かった



第 18 図 多遺体再葬土坑

かという、頭骨は頭骨でこっちにまとめて置いてあるでしょう。四肢骨は四肢骨でまとめて配置し直しています。そこで1回埋めたものをもう1回掘り上げて、恐らく洗骨をやるのです。骨を洗うのですよ。沖縄で良くやりますね。あれと同じ方式で洗った後にもう1回埋め直す。これを「再葬」、あるいは「洗骨葬」ともいうのですが、これが関東地方のこの時期に多く出現します。千葉から東京あたりにかけて、広く分布します。なぜ両方の1号土坑と2号土坑を掘り返して、それを一緒に埋め直したことが分かるかというと、権現原の土坑墓から出土した歯の持ち主を探したところ、「再葬土坑墓」から出土した頭蓋骨のうちに、たまたま歯が抜けているのがあったのですよね。そこで、渡辺さんが植立するか調べたら、見事に植立しました。抜け落ちた歯が土坑墓に残っていたのです。本来の持ち主が判明したわけです。縄文人がうっかりしていてですね、再葬する時に落としてしまったようです。後できちっと植立したので、本来はこの場所にあったのは間違いありません。

それでは南群と北群は最初にどういう人たちの集まりだったかというと、形質的、歯の形から見たのですが、兄弟関係でもなければ、親子関係でもない人々であるといえます。まったく血縁的に

無関係な人たちが権現原にやってきているのだと。問題は何故かということなのですね。これが今日の一番大きなトピックスになります。このような形で、市川市、取手市、松戸市でこのようにたくさんの多遺体の再葬土坑が出ておりまして(第18図)、中でも取手市の中妻貝塚では、DNA鑑定が出ました。DNAでも、特にミトコンドリアDNAというのがありまして、これmtDNAというのですが、その結果が提示されています(篠田他1998)。普通のDNAというのは、子孫に遺伝するときは父親と母親から半分ずつ貰って合成されて来ていますが、mtDNAの場合は父親から一切貰っておりません。母親からだけ貰うのです。母系遺伝なのです。mtDNAは皆さんも、お父さんからは一切貰っていません。母親から貰っています。母から子供へ、そして孫へ。そういう風にこのmtDNAは継承されるという特徴があるので良く母方を継いだ人骨間の関係性が分かるのですね。

これで調べたら、なんと、この中妻貝塚再葬土坑の人骨は、ある特定の女性を中心に男性も女性も、しかも複数世代に渡って、少数の特定の女性の遺伝子型(ハプロタイプ)を受け継いでいることが分かりました。これは何かというと、母系的に繋がる集団だということです。つまり、後期には単系出自の母系制社会が成立していたということが推定されたのです(篠田他1998)。これは大変な成果です。

もう一度話を中期に戻しますが、先ほど、草刈集落の中期の段階での202号住居の廃屋墓は男性中心の埋葬だったでしょう。228号住居では女性中心。516号住居では男性が中心でした。廃屋墓ごとに、男中心と女中心のものが分かれています。もしこれが家の世帯主が埋葬されたとするならば、この202号住居と516号住居では男性中心に家をずっと継いできたということなのです。でもまったく女性を排除していないので、

完全に父系だとは言えません。ただ、父方に偏ることは間違いない。逆に、228号住居の例では、男性は完全に排除してないけれど女性を中心に家を継承してきた。202号住居と516号住居の場合、男性中心の埋葬が見られ、どちらかと言うと父系的な継承の仕方です。逆に228号住居の場合は、女性の方に偏りがあり母系的な継承の仕方です。このように中期には男系的、女系的の二つの偏りがあります。しかも個別にみてゆくと必ずしも片方の性を完全に排除しているわけではない。だから、これは時には男性で継いできたものが、時には女性で継ぐことがあるよ、ということを示しているし、場合によっては、女性でもいいし男性でもいいと。こういった両方で継げるやり方を非単系出自、あるいは双系出自といいます。双系制、これを覚えておいてください。どちらの性で継いでもいいよ、ということです。

先ほど鎌ヶ谷市の根郷貝塚でも、男女比をみたら、男性と女性が結構混ざっていましたよね。あれは、男女のどちらでも家督を継いで継承してきたといえます。それに比べて、中妻の集団は母系制に変わっているのだということです。なぜ中妻の集団が母系と判断されたかという、もし父系制だとすればこの家は代々男性が継いでいくので、生まれた女性は外に嫁いで出て行きますよね。その代わり、その男の人に外から多数の女性が嫁いでいきますから、その分だけ多数のハプロタイプが出現するはずですが。

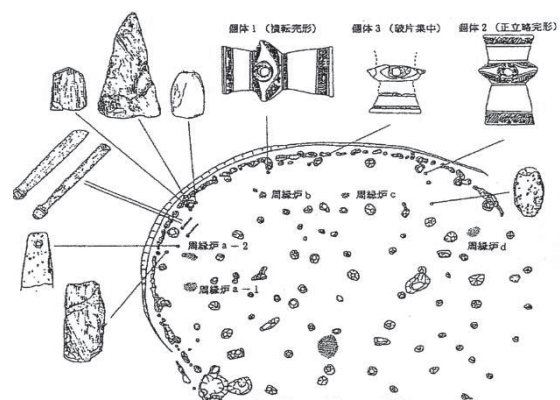
ところが、この中妻の事例では、ほとんど限られたハプロタイプが中心になっています。母系でその家に生まれた女性が家に残って、さらに子孫を増やしたとしか考えられない。ということから、縄文後期のある段階で単系出自の母系制社会に変わったぞということが推測されております。

つまり、中期の双系的な社会から、後期の母系制社会に変化したということを頭に入れておいてください。母系制社会を迎えて、後期社会はどの

ように変わったか。その居住形態と集団の組織編制のあり方、信仰、婚姻、こういったところを見ていきたいと思います。第19図は千葉市加曾利北貝塚の東斜面で検出された事例ですが、これは直径17、18mありますよ。これを大型住居といいます。ここでは、通常の生活では使われないような、特殊な異形台付土器というのが3例出土しました。壁際から石棒が2本出てきますよね。日常的に使う様なものはほとんど出ません。大事なのは、こんな大型住居、どう見てもお父さんお母さん、子ども3人位の核家族が住むには大きすぎます。直径が十数mあります。しかも、日常生活には使わないような物ばかり。それが、壁際にずっと並んで検出されました。

第20図は市原市の祇園原貝塚ですね。ここでは堀之内1式くらいから安行式くらいまで、後期の前半から後半にかけてなんですが、普通の住居がある中で、台地の最も高い箇所に2軒の大きな竪穴住居が出てきます。大型住居について他の事例を見てみましょう。

佐倉市井野長割遺跡からも類似の異形台付土器が出ています。こんな器形では煮たり炊いたり出来ませんよね。ものを盛って食べることも出来ない。むしろ何か超自然的な霊に捧げる何らかの儀礼的な場で使われたような器形です。そういった



第19図 加曾利北貝塚東斜面の大型住居
(阿部 2004 より)

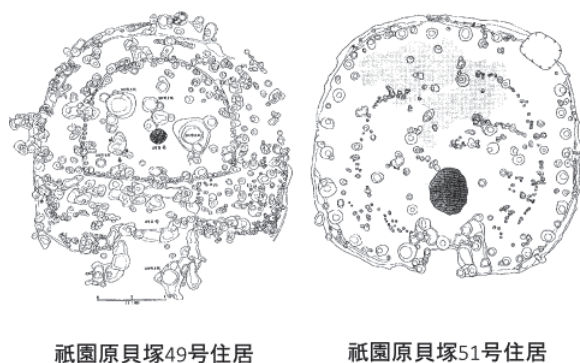
ものが最近たくさん出て来まして、同じ市原市の菊間手永遺跡でも、これは直径7mで小ぶりな方なのですが、やはり、異形台付土器が出て、石棒が出て、ミニチュア土器が出て、小型の定角石斧も出て、ここに動物形土製品が加わります。これはイヌなのかイノシシなのか良く分かりません。同じ市内の能満上小遺跡では、やはり大型住居が検出されております。直径が12mあります。ここからイノシシ形土製品が複数出ているのです。これは日常生活では使わないじゃないですか。後期になると大型住居を中心に、そういう儀礼的な遺物がたくさん出てきます。

この大型住居というのは祇園原貝塚でも2軒大きいものがありました(第20図)。一軒(51号住居)は加曾利B3式で直径が18mあります。他の一軒(49号住居)は曾谷式、あるいは安行1式でしょうか。こちらはアルファベットのD字型に近い。直径が17、18mあります。どう見ても普通の家族が住むには大きすぎますよね。この図を見て皆さん気が付くでしょうか。この大きな住居プランの中に、もう一つ小ぶりのプランがあるでしょう。この大きいプランの内側に、もう一列の柱穴列が巡っているじゃないですか。

そういえば先ほどの加曾利貝塚北側斜面の大型住居でも、内側にもう一列の柱が巡るのですよね。この大型住居といっている住居には、内側に小ぶ

りの同形プランが回る事例が多いことも分かって来ました。私も強調しているのですが、まだあんまりよく承認されておりません。炉は何処にあるのかと言うと、必ず内側プランの中にあります。これに反して外にある例は1例もありません。偶然の重複と言う人もいるのですが、あまりにも見事に入っちゃっているのですよね。これはどういうことだと言うと、例えると家の入口に入ると、内側に閉ざされた別の空間があるということになります。これは閉ざされた環境で、外から入ってきた人には、内側の空間で何をやっているのかが全く見えない。そういう閉鎖性と言いますか秘密性というか、ちょっと神秘的なところがありますね。そして、内側の空間に炉があるわけでしょう。そもそも日常生活の匂いがしない所に設置された炉ですから、何の為に火を使ったかよく分からない。ここで日常の食事を摂ったりすることはなさそうです。むしろ儀礼的使用を目的として建設されたものです。

大型住居の「二重構造」をどう理解していくかが重要な課題です。ある意味では、あまり外部の人には見て欲しくない。例えば、若者を集めて刺青をしたりイニシエーションしたとかね、肌に傷をつけたり、瘢痕儀礼とかメラネシアの民族誌に見えますよね。耳飾りもよく出るので、年齢が更新するとともに耳飾りを更新するという、そういった儀礼が行われた可能性もあります。特に耳飾りはたくさん出ます。重要なのは、ここで石棒が出たり、土偶も出ます。ですから、先祖祭祀に近い可能性があります。さらに、大事なのは、動物形土製品が出土して、集団のシンボリックな役割を果たしている点です。そのシンボルに表徴される個別集団が関わっていることを示しています。大型住居の近くには、往々にして深さ1m50cmとか2mもあるような深い大型土坑が掘られます。千葉県や埼玉県でたくさん出ています。底部に中央ピットが掘られています。一度埋められ



第20図 祇園原貝塚の大型住居
(市原市文化財センター 1999 より)

たかなと思うともう1回掘って、また埋めてと、この所作を繰り返したのが結構あります。これは千葉も同じなのです。掘り返すなどの特別の所作が関わります。多分動物儀礼などが絡んでいるかと思って見ているのですが、動物供犠ないし再葬だろうと思います。

こういったことを、様々な材料として考えると後期はどういった社会なのかというのが大事なのです。中期の変動の果てに後期にこういった社会が出来ているのですが、それを明確にして位置づける必要があります。

重要なのは集落そのものが縮小し小さくなります。1、2軒の住居、3、4軒の住居で、中期のような大型環状集落はもうありません。1戸1戸が、恐らく実に血縁関係で結ばれた集団が分散して住んでいる。そういう状況に近いだろうと思います。しかも単系出自の母系制社会に入っています。

これは血縁集団が社会の単位になっているということなのですね。地縁集団ではありません。こういった、単系出自の出自集団をリネージ(家系)、まとまりをクラン(氏族)と呼ぶのですが、数世代前の共通の先祖に由来し、系譜を辿って自分たちに至っているのだという共通の系譜認識に支えられています。それ以前には無かった親族構造の論理です。そのような変化が実は後期に起こったのです。そういった系譜的な血縁紐帯で結ばれた集団を日本語では「氏族」といいます。それが後期に出てきたということなのです。先ほど草刈貝塚で見たような非単系、双系出自の集団から、単系出自集団への移行が中期の終わりぐらいにやってきたわけです。出自集団と言うのは、先祖をすごく大切にするのです。何故かと言うと、出自集団の社会に生きている限り、自分がその集団のメンバーと認められないとその集団の活動に参加できないばかりかテリトリーにさえ入れてもらえないのです。資源を利用させてもらえないどころか、

住居を作ること禁じられてしまう。それくらい厳しいのです。では、それをどうやって証明するかっていうと、盛んに先祖祭祀に参加するのですよ。自分はちゃんと集団の先祖祭祀に出ているぞということを証明することによって、「お前は俺たちと同じ仲間だよ」と認めてもらうわけです。ですから、先祖というのはものすごく大切になります。後期になりますと全国的に先祖祭祀が活性化しますが、そういう意味があります。

そうすると、例の大型住居って、誰が造って誰が維持したのかということ、今まではその地域全体の人たちが皆で造ったと表現してきたのですが、実態はどうも違う。実際の運営にかかわったのは特定の出自集団(氏族)だけです。例えば今までだったら高橋も山田も山本も、全部の地域集団が使えたと考えてきたのですが、実は個々の出自集団が運営の主体を握っており、彼らが自ら造って自集団だけで運営したと見做す方が適切だとわかってきました。先祖祭祀に基づいた出自集団が編成されたのだと、そういう組織に変わってきたということです。

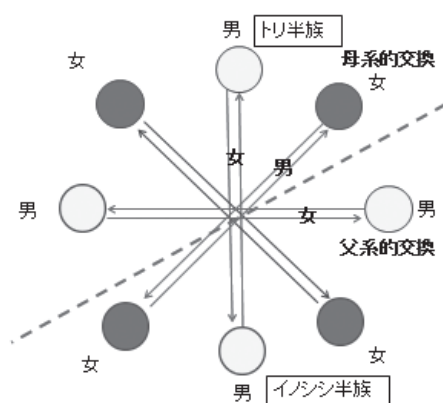
その具体的な運営には、やはり氏族集団内でイニシアティブをとるリーダーがいたのです。誰かということ、これはだいたい老人です。民族誌を調べるとそのような部族社会で、氏族社会が成立しているところでは、やはり儀礼や祭祀のノウハウや手続きを知っている人が重要です。これは若者には無理なのです。そうした老人がイニシアティブを執っていますね。

そういった視点から中期にもう1回戻ります。中期の環状集落をどういう風に考えるか。わざわざ一つの集落に集まって、内部が等分化した環状構成をなすにはそれなりの理由があると思います。環状集落というのは、単なる労働編成上の集団というのではなくて、そこで婚姻を取り結ぶ場所だとしたら、どういうことになるか。つまり、対面したブロック同士で、配偶者を交換するよう

なことがなかったか。集落内婚を考えてみたいと思います。

先ほどの中期の環状集落の話の中で、トリとイノシシの話しましたね。これがキーワードと言ったのですが、双分的な二つの集団の表徴的な意味があると思います。鹿角製腰飾り（トリ）とイノシシ牙製の腕輪を装着した人物（イノシシ）は、それぞれ二つの動物を表徴する半族の血縁集団の代表者であった可能性があり、集落が二つの半族によって占められる前提で話を進めましょう。草刈貝塚では、男性中心のブロックと女性中心のブロックというのが交互に出ていたので、それが全体では8ブロックあるとして、男性中心、女性中心、男性中心とこういう風に交互に並んでいます。ちょうど8つあるのでそれぞれ4つずつ男女で分かれるとして、4ブロックが1単位の半族をなし、トリとイノシシの半族が双分的に向かい合って限定交換することを考えてみたいと思います。第21図の中央の点線により、集落を二分し、一方がトリで他方がイノシシの半族構造を考えるわけです。

男性中心のブロックでは広場を挟んで対面する男性中心のブロック同士で女性を交換し、女性中心のブロックは対面する女性中心のブロック同士で男性を交換するというようなことが考えられます。ここで向かい合ったブロック同士で夫か嫁さんを交換している可能性があります。男性を中心



第21図 環状集落における半族の内婚（限定交換）

とする集団間では、恐らくやり取りするのは女性です。決まったブロック同士の配偶者交換、これを「限定交換」と言います。決まった家同士で何世代にも渡って女性が往復するのです。女性を中心とする集団は、女性に家督を継がせて余った男性たちをどこに出すかという、対面するブロックに男性を嫁がせるのです。そこでは女系的に継承される家なので、嫁いだ男性よりも女性の方がドミナントなので、世帯の長は女性が務めるのです。だから亡くなった時は女性が廃屋に埋葬される。男性たちはどこか土坑のようなところに埋葬されるのでしょうか。あるいは先ほど述べたように集落の外に出て新たに小集落を形成したかもしれません。実態はまだ判明しておりません。逆に男性中心のブロックでは、女性を交換するのですが、男性がドミナントな地位を占めるので、長たる男性が廃屋墓に埋葬されます。このような「限定婚」のあり方は、集落内婚の可能性を考える時に重要です。草刈集落で大切なのは、非単系出自、双系的であるものの男女のブロックにおいてそれぞれが単系に近い在り方を示している点です。そのままだちらか一方が失われれば、単系出自に移行する状態にあります。

もう一つ別の内婚制度の在り方を考えてみましょう。ちょっと時間が無くてすみません。草刈集落では8ブロックが横に円環をなしており、その構造に従って配偶者を、右回りに循環させる、つまり時計回りに順次配偶者を一人ずつ嫁がせるとしたらどういうことになるか（第22図）。草刈集落が内部でそのような一般交換をとった可能性も無いとはいえないので、両様の可能性を模索する必要があります。これはこの環状集落の中で各ブロックがこの様に円環的に並んで機能したとするならば、内婚的ではあるが一般交換的な流れも検討しておいた方が良いかなという程度です。成立するかはともかく、このように順次隣のブロックに配偶者を与えていく循環方式の内婚

が理念的に考えられからです（第 22 図）。男性中心のブロックである第Ⅱブロック（男系）から父系原理にのっとり女性中心の第Ⅲブロック（女系）に向けて女性を嫁がせる。

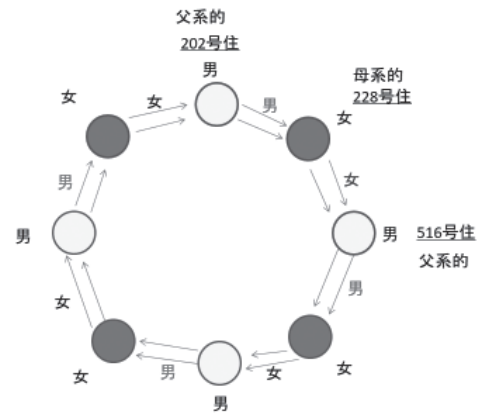
第Ⅲブロックは女性中心の家なので、女性の主人がおり、彼女は第Ⅳブロックに向けて母系原理にのっとり男性を嫁がせたと想定します。

草刈集落の場合特殊なのは男性が継承する家と女性が継承する家が、一軒ごとに異なっており、交互に配置されることです。

男性を中心として世帯主とするか、あるいは継承していくかは、その家々で決めていいとなれば、この 8 軒の集落では、家をどんどん順繰りに回っていく、こういうシステムになりうるわけですね。もし、それが単系出自であればレヴィ＝ストロースが「一般交換」と表現した内容に近似します。

しかし、結論的にいうなら、草刈では単系出自における一般交換とは考えにくい点がありますので、集落内の循環は考えにくいと思います。中南米の婚姻に関する民族誌でやはり円環構造を呈する集落の内婚についてレヴィ＝ストロースが紹介しているものがあります。ただし、それは限定交換についてです（第 23 図）。

何故こういうことを言うかということ、私も未開世界の民族誌を調べているのですが、長老たちが一番困るのは何かということと婚姻の問題です。自分の村に男の子が生まれたとすると、普通よく世継ぎが産まれたからと言って大喜びするように考えがちですが、老人たちは一様に心配そうにひそひそ相談しています。「弱ったなあ」という表情ですね。なぜ心配するかというと、その子が 15 年後、20 年後に成人した時に、婚姻で来てくれる嫁さんを探さなきゃいけないと。これは大変なことなのですね。食料が足りないとか、そういう経済的問題も非常に大事なわけけれども、しかし、もしその嫁さんが来るルートを見つけなければ、ハッキリ言って 1 世代で集団が死滅する恐れが出



第 22 図 環状集落と循環的交換

てきます。また女の子だったら何処に嫁がせるかということですね、長老たちは早くから決めなくてはならない。それは、大変なのです。今みたいに、我々の時代ならば北海道の人と九州の人が列島を縦断して何処で出会ってもおかしくないという状況であればいいですよ。縄文時代においては、地域の中で婚姻連鎖網に乗り損ねると、その一族消滅ということが心配なのです。そういうこともあるので、縄文時代に、地域にそのような集落内でお嫁さんやお婿さんをやり取りする、そういうルートを前提に婚姻がなりたっていたはずですが、環状集落の成立要因について同様の視点から充分考えておかなくてはならない。

環状集落内で循環的に横に婚姻がなされたとして、1 回目に男と女が時計回りに回るでしょ。これ 1 周した段階で 2 巡目が始まります。2 巡目はどういうことになるかというと、いとお同士の婚姻になりますよ。3 回目はもっと血の濃いイトコ同士が周っていく訳です。

こういうのを交差イトコ婚と言うのですが、環状集落の隣方向で 1 回目の婚姻をします。2 巡目では、こちらのブロックで生まれた子どもが、隣のブロックで生まれた子どもとまた結婚するので、これまたイトコ同士が結婚する。限定交換でも一般交換でもみんなそうなのです。

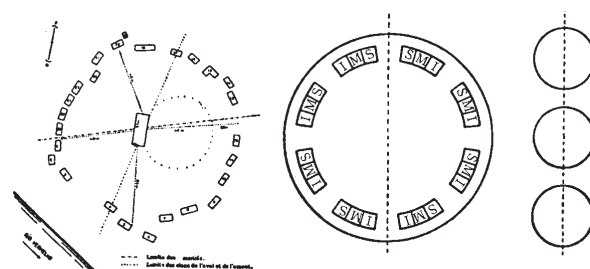
そうすると、いつの間にか大変な事態がやってきます。限定交換では、対面同士の向かい合った

人たちが、これを兄弟姉妹婚と言うのですが、「俺、妹やるから、お前は姉ちゃんくれよ」と。AとBとの家でそう言うようなことをやるわけです。それがさらに、2世代3世代継続されると、もう、血の濃いイトコ同士がどんどん結婚する事態が生じます。同じように、循環による交換の時も、2代目3代目とですぬもう全員がイトコ同士で結婚するという羽目になる。イトコ同士って珍しいと思うかもしれませんが、日本でも大正年間の婚姻では、数%はイトコ婚というのは珍しいことではなかったのです。今イトコ同士の結婚は比較的珍しいと思いますが、昔はそれ程珍しい事ではなかった。もし、この集落の中で婚姻を続けていくと、あっという間にこのように血の濃い集団ができてしまいます。

さっき言ったように、それを環状集落の中で循環的にやるのでそれは本当にできるのかは大きな問題です。男系と女系の家同士で人員の交換をすることになりますので矛盾します。左から右へと人を交換していった結果、うまく男系、女系に分かれるように工夫することは不可能だからです。

以上、2通りの配偶者交換について環状集落を基点に考えてきました。「限定交換」と「一般交換的循環婚」を考えたのですが、後者の「一般交換的循環婚」は成立しにくいと思います。婚姻に関するネットワークはたいへん重要な問題です。環状集落が解体する原因として、内部での限定的な婚姻連鎖がいずれ障害をおこしやすい状況を想定し、解体の主要因と考えてきました。もちろん、それ以外の婚姻システムを考慮する必要もあるかと思います（佐々木 2007、丹羽 1982・1999）。環状集落が地域のローカルネットワークのハブとしての機能を持ち合わせていたことも想定すべきで、そこに大きな変革が起こりうることも認めて次に移行したいと思います。

いずれ縄文の後期になると母系制に変わってくる。それまで中期までだったら、家督の継承は男

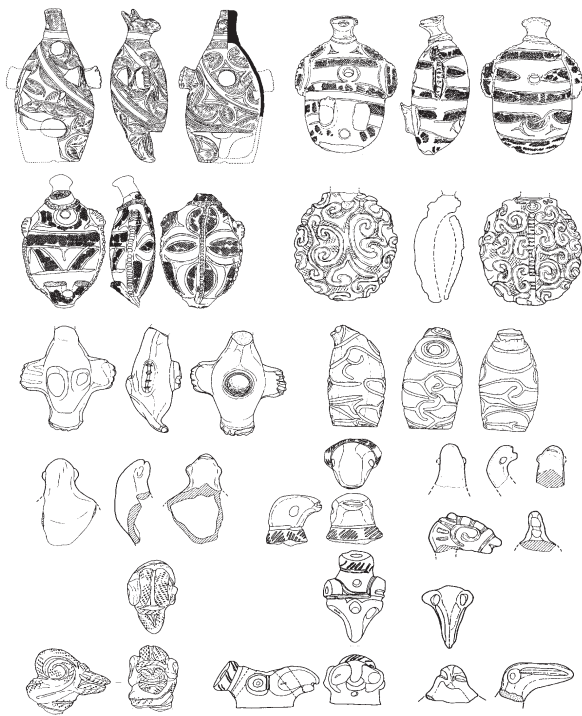


左：ケンジャラ集落の平面図、右：ボロロ族集落の古典的図式
S：上層階層、M：中層階層、I：下層階層
(レヴィ=ストロース 1985による)

第 23 図 民族誌に見る環状集落の内婚
(レヴィ=ストロース 1985 より)

女のどちらでもいいよ、時には同じ世帯ですら男性が女性に変わったり、女性が男性に変わったり出来て融通が利いたのだけど、後期を迎えると、中妻貝塚で見たように、同じ mt DNA を持つような母系制になっていく。母系制とは集団の系譜が母方を繋いで辿る方式で、母親から娘に継いで、娘がさらに孫娘に継いでという制度です。家督もそのように継承されます。これを単系出自制度と言うのですが、男で継ぐのは父系です。単系出自による継承制度はすごく大事なのですが、後期にはそういう制度になったということです。

こういった親族構造の変革は、親族組織の構成員の扱いにも変化があります。ここでちょっと考えておきたいのは、トーテミズムについてです。皆さんこの言葉をご存知かと思うのですが、人間と特定の動植物が実に緊密で強い紐帯で結ばれた社会的関係。これは、特定の表徴的な動物間で起こるのでトーテミズムと言うのですが、縄文後期になると、この様な動物を模した動物形土製品が出て来ます。第 24 図の土製品は今まで「亀形土製品」と呼ばれていたのですが、最近これは鳥だと、東京大学の設楽先生が提案されたものです。埼玉県の東北原遺跡例（第 24 図右上例）について、かつて文化庁の土肥孝さんも二足形態に着目して「これは鳥だよ」とおっしゃっておいりました（土肥 2006）。今まで亀だって言っていたのですが、確かにそういわれて見ると、首から上に着く



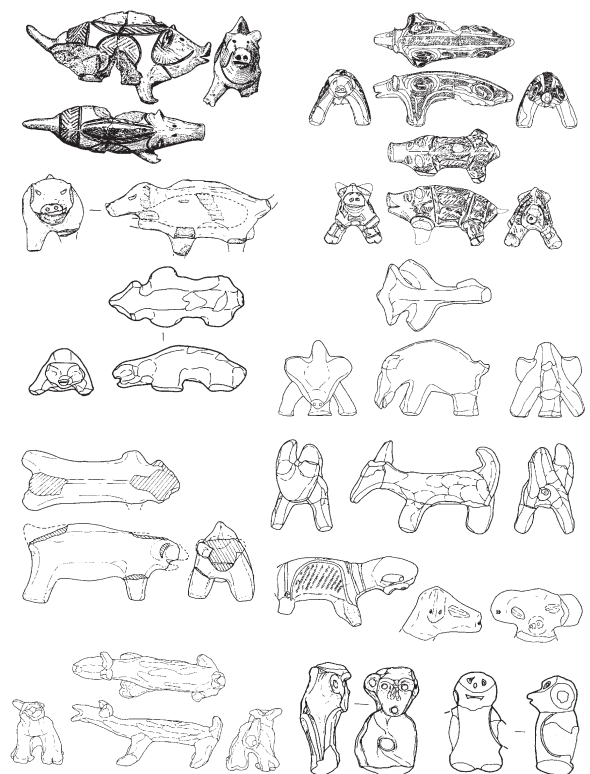
第 24 図 動物形土製品（トリ形）

顔を見たら、トリだということが分かってきたのです。ずんぐりしているんですが、蓮田市の久台遺跡例についても、これも二足が読み取れます（第 24 図 2 段目左側）。結局これらはトリという風に改められたのですが、後期に「トリ形土製品」が非常に多く作られます。

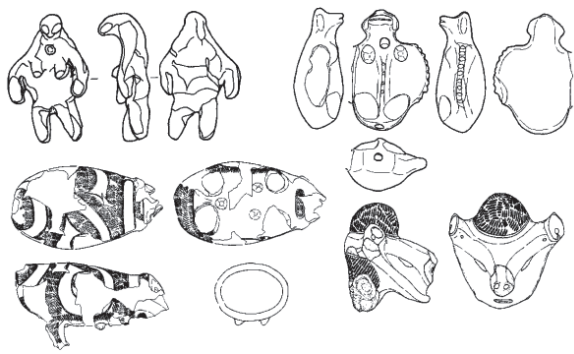
もう一方で何が多いのかと言うと、イノシシですよ（第 25 図上段）。千葉県でも多数見られますし、ずっと東北地方にも広がっています。しかし、青森とか秋田に行くとクマがどんと出て来ます。さらに甲信から東北にいくとイヌが出てくるでしょう。だから、やれイヌだ、クマだ、トリだ、サルだという風に幾種かの動物が土製品になっております。これはサルなんですけれど、ちょっとかわいく作られております（同図最下段右 2 例）。縄文人は幾百、幾千の多数の動物を知っていたはずですが、そのうちで特定の限られた数種類の動物の土製品だけが作られています。

さらに大事なのは、岩手県山井遺跡の事例（第 26 図左上例）は今まで土偶扱いしていたのです

が、実はトリ顔をした人間ではないかということです。五体満足に作られていて、ここに人間のオッパイと変わらぬものが付けられている状態です。だから女性だと思うのだけれど、しかし、顔を見たら人ではなくトリなのです。こちらは、岩手県の大橋遺跡から出ているトリ形土製品です（第 26 図右上例）。足が二つあります。胸に二つあるのは何かといったら、オッパイなのです。トリにオッパイありますか？聞いたことないですよ。この秋田県の向様田遺跡から出たクマ形土製品には、ちゃんと足が 4 つあって、胸にやっぱり大きな一对のオッパイが付いています。動物に人間のオッパイを模して付けているのです。つまり何が重要かというと、体は人間のんだけど、顔はトリです。要するに「半獣半人」の形です。これなんかも、トリに人間の要素を含ませているし、第 26 図下段左側はクマを人間と見なしているのです。同図右側は、大迫町（現花巻市）立石遺跡から出ているのですが、どう見たって土偶なので

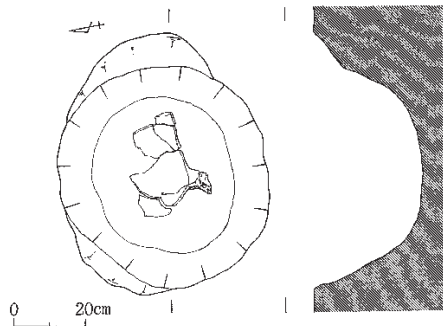


第 25 図 動物形土製品（イノシシ、クマ、イヌ、サル）



第26図 動物形土製品（人と動物の折衷形）

すが、顔は動物です。これは、おそらく下半身は人間なのだけど、顔はおそらくイノシシ、あるいはクマだと思います。要するにトリの場合と一緒にですね。「半獣半人」の形をさせている。これは何を示しているのかというと、人と動物の「共通の母」から来ているのです。つまりトーテミズムとは、自分の先祖が、ある共通の動物に由来し、自分たちはその末裔だよ、って言うことをトリとかイノシシと人間との間で取り決めるのですね。これをトーテミズムと言うのですが、後期には出



第27図 群馬県陣場遺跡のトリの擬制的供犠
（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 より）

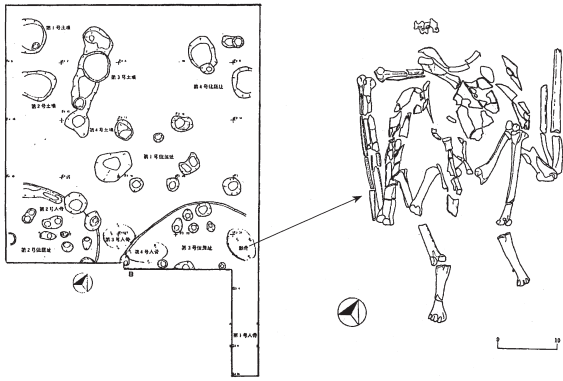
て来ます。

これが後期になる前はどうかであったかという、何と中期の加曾利E 4式だと思うのですが、群馬県の陣場遺跡では、わざわざ穴を掘って土器の破片を埋めています（第27図）。破片と言ってもトリ形把手の破片で、この部分をバリって破って埋めますよ。破片だから土器の内容物を埋めている訳ではないのです。明らかに破片を埋めているわけで、擬制的な供犠だと思います。中期にはこのような特殊な事例が出てきます。

これ同じ時期の加曾利E 4式なのですが、ひたちなか市の三反田蜷塚貝塚、中期の墓域があるのですが、人間の遺体を埋めるお墓があって、その一角にこういう骨格を埋めたのが出ています（第28図）。調査者は、あまりに立派な骨なので、これは恐らく人間の骨だと誤って処理していたら、発掘後に専門家の鑑定で、これは人間ではなくオジロワシだということが判明したとのことでした。人間と同じくらい大きいのです。翼を広げると2m近くあるのです。猛禽類です。人間と同じ扱いを受け墓域に埋められていたのですね。不思議なのは、頭の首の骨だけがないのです。つまり、首を切られたのですね。しかも食料としていない証拠に解体痕が無くて、首だけを切って、残り全部を穴に埋めたということです。つまり何のために殺したかと言うと、殺して埋葬するためです。こういうのを動物供犠と言うのですが、この遺跡では実際にオジロワシをやっています。

この遺跡ではそれに呼応するように象徴的にトリ形の把手が2点出土しています。

加曾利E 4式段階では、まだ動物形土製品は出現しておらず、トリ形の把手として土器に付されていきました。それを観察すると猛禽類だと思うのですが、これを横から見ると嘴がちょうど猛禽類のように内側に曲がっている。こういう把手が、三反田蜷塚貝塚で2点伴います。つまり、これは何かと言うと、自分たちがトーテムとして信奉し



第 28 図 ひたちなか市三反田蜆塚貝塚の
オジロワシ供犠(勝田市教育委員会 1982 より)

ている動物を殺して供犠をし、なおかつ、それをイメージしたトリ形把手を作ることなのです。ここでは供犠して埋葬されたと同じ種類のトリ形把手が出ている点が重要です。偶然の符号にしてみれば見事すぎます。

宮城県の田柄貝塚という後期～晩期の貝塚があります。ここでは普通の人間の墓域の中にイヌが多数埋葬されていました。普通の感覚ならばそんなことはしないでしょうね。さっきのオジロワシの場合もそうですよね。人のお墓と同じ場所に動物を埋めることは、まず我々現代人の感覚ではないのだけれど、ところがこの遺跡では、イヌのお墓があります。ここではそれに符合するようにイヌ形土製品が出ているのです。集団表徴として崇めて動物形土製品にしたと同じ動物を供犠する。これはトーテミズムの一面を現したものです。

そのようなトーテミズムが最終的に確立するのは後期です。加曾利B式前後から、その位の段階に確立するのですが、その直前の中期段階というのは、そういったものが確立する途中の過程と考えて下さい。だから、中期末の陣場遺跡のトリ形の把手もそうです。飯能市の落合上ノ台遺跡で出たイノシシの把手や青梅市、羽村市、八王子市周辺ではトリとヘビの折衷形態のような把手を持つ土器が、中期半ばから中期の終わり位の土器の把手に出てきます。ある人はイノシシと言い、ある

人はヘビと言うのですが、確かに両方の折衷と言うのもあるようです。イノヘビ、トリヘビみたいな言い方は、山梨の小野正文さん、新津健さんがそういう風に呼んでいます。顔はトリなのだけれど体部にヘビの特徴が入っていたりして、奇妙な融合合体です。

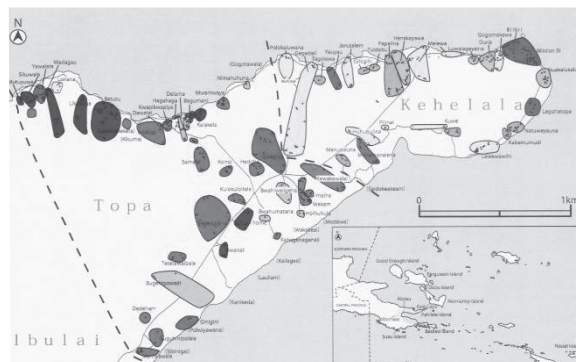
このような形で、中期末から後期になると動物形把手や動物形土製品を製作し儀礼に供する一方で、土製品と同じ動物を実際に供犠しているかと思うと、すごく大切な扱いもして、亡くなったら人間と同じ墓域に埋めている。

下太田貝塚の供犠されたイノシシの場合でも人間に対すると等しく屈葬しているのですよ。不思議ですね。イノシシの足を折り曲げて屈葬しているといわれております。わざわざ。人間と同じ秩序の中に動物を巻き込んでいるんですね。これはロバートソン・スミスの定義なのですが、人間側の論理に組み込むわけです。動物形土製品は、昔は玩具ではないかと言われたのだけれど、分析してみると一つの遺跡では1種類の動物形しか出ません。全国で二百数十のデータを扱って論文を書いたのですが、平均値は1.07ですか。要するに、一つの遺跡の集団はほぼ一つの動物種しか持たないということです。三つも四つも持たない。昔は玩具だと言われたので、それこそ玩具なら何種類の動物形が出てもいいのですが、そうじゃないのですよね。たった1種類です。

千葉県印西市で戸ノ内貝塚を発掘したのですが、そこではトリ形土製品の一部が出ています。同じように周辺の遺跡で、どんな遺跡でどんな動物形土製品が作られているか見たら、佐倉市の遠部台とか曲輪の内とかはトリ形です。宮内井戸作もトリです。あそこは、複数型式にわたってトリ形が出ています。しかし、千代田とか吉見台とか井野長割では、実はイノシシなのです。地域社会というのは、出土する動物の土製品の違いで明確にわかるのですが、これハッキリ言ってクランが

第 29 図の地図はイーストケープの先端近くを

フラナ・クランというクランは、鳥トーテムはマギスブです。これは、ランドイーグルといいまして陸鷲です。マギスブってフラナ・クランにしかないのですね。本当は魚も蛇も植物もトーテムがあるのですが、それ全部を知らなければクランはわからないはずなのですが、鳥が決まると自動的に他のトーテムも決まっちゃうので、だいたい鳥トーテムが分かったらクランが分かるのですね。僕らのインフォーマントが個人の情報を集める時に、直接的にクランは何だとは聞けないので、「お



第29図 PNGイーストケープのクラン配置

前の鳥は何だ」と聞くんですね。歩いている人を捕まえて、「お前の鳥は何だ」って聞くと、「俺はマギスブだよ」といった場合、それを聞いただけで、彼のクランを知ることができます。こうやって地域のクランを全部調べました。そうするとやはり、クランが違うということは、持っているトーテムが全部違うということです。つまり、現代においてもトーテムは未だに存在しており、かなり変容を受けている地域においても、未だに、外婚制の表徴として使われますね。つまり、同じクランの成員同士は結婚しません。だから同じ鳥トーテム同士では絶対結婚しないのですよ。近親相姦を避けるということなのですね。

同じように、縄文社会を見ていくと、後期の単系出自の母系制社会に変わった段階で、恐らく、家を継ぐのは母親でそして、娘であり、孫娘であって、男は家を出て行くのですね。でありながら、男も自身のクランのテリトリーを護っていかなければならない。単系出自社会の厳しいのは、他の集団に対して実に排他性が強い点です。自分の仲間にはすごく温かいのです。だけど他の集団に対しては、「俺たちの資源を使ってくれるなよ、お前は自分のがあるだろうから、それを使えよ」と。だから非常に厳しい。アメリカのインディアンなんかはみんなそうなのですけど、自分はその氏族集団の成員だによってどうやって証明するか、それは先祖祭祀に盛んに出ることなんですね。だから、さっき言ったように先祖祭祀に使われた大型住居があるじゃないですか。先祖祭祀が盛んに行われるようになった背景の基本には、そういった親族集団と出自システムの変化が起こっているということです。

なおかつ、同じ共通の先祖に由来するトーテムズと絡んできますが、これは氏族制の確立にも絡んで来ます。そうすると中期末に環状集落が解体して、分散化への動きが加速化した結果、後期にいったいどんなシステムが出来たかということ

が重要です。一つは親族構造の大きな変化です。二つめは出自制度の大きな変化。三つめは婚姻制度の変革です。トータル的な変化が考古学を通じて、土器把手に見る動物表徴、あるいは鹿角製腰飾りで表現していたものが、形を変えて最終的には動物形土製品になって出現するということです。

ですから、目には見えにくい社会制度が大きく変わっているということなのです。恐らく地域の中期環状集落の解体に発する分散化への動向は、大きな社会変動の動向をよく伝えるもので、実際に内部に起こった様々な変革は墓制や装身具などの変化に敏感に反映しているのだろうと考えております。

すみません、時間が無くて充分ではありませんが、これで終わりにしたいと思います。

付記

本稿は、平成28年1月17日(日) 大宮ソニックスシティで開催された、平成27年度ほるたま考古学セミナー『縄文中期の大環状集落を探る！一桶川市諏訪野遺跡を中心に』において特別講演をいただき、高橋先生の御厚意により収録させていただいたものです。

註1 この部分は私の事実誤認である。草刈貝202号住居からは、鹿角製腰飾りは1点出土したのみである。他の1点は190A号住居からの出土であり、その点を訂正する。

したがって、血縁集団の長としての役割が同じ世帯で世襲された可能性については、改めて撤回する。むしろトリ形の鹿角製腰飾りが隣接する他のブロックに属する190A号住居から出土したことは、役割が固定せずに世帯間で流動的であったことを示すのであろう。しかし、北側にあるブロック群に属するので、202号住居の世帯と同じ双系出自集団(トリ)に属する可能性が高い。

註2 註1に同じ。

引用文献

- 阿部芳郎 2001「縄文時代後晩期における大型竪穴建物址の機能と遺跡群」『貝塚博物館紀要』28号
千葉市加曾利貝塚博物館
- 阿部芳郎 2003「遺跡群と生業活動からみた縄文後期の地域社会」『縄文社会を探る』学生社
- 植木弘他 1987『行司免遺跡—遺構図版編—』嵐山町遺跡調査会報告
- 上野真由美 2016「県内における縄文中期集落のあり方」『縄文中期の大環状集落を探る！—桶川市諏訪野遺跡を中心に—』要旨集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 遠藤匡俊 1997『アイヌと狩猟採集社会—集団の流動性に関する地理学的研究』大明堂
- 大塚俊雄 1995「根郷貝塚第一次調査人骨の出土状態について」『鎌ヶ谷市史研究』第8号
- 小野正史 1989「土器文様解読の一研究方法」『甲斐の成立と地方的展開』
- 金子直行 2006「縄文中期環状集落解体への序章—「時（クロノス）」としての土器からみた「場（トポス）」としての集落変遷」『ムラと地域の考古学』同成社
- 熊澤孝之 2010「縄文時代」『掘り起こせ！地中からのメッセージ』飯能市教育委員会
- 黒尾和久 1988「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』第454号
- 小林謙一編 2005『縄文研究の新地平—勝坂から曾利へ』六一書房
- 小林謙一編 2012『縄文研究の新地平（続々）』六一書房
- 小林達雄編 2008『総覧縄文土器』UM プロモーション
- 小山修三 1984『縄文時代—コンピューター考古学による復元—』中公新書
- 佐々木藤雄 2007「婚姻と家族」『縄文時代の考古学 10 人と社会』同成社
- 篠田謙一・松村博文・西本豊弘 1998「DNA 分析と形態データによる中妻貝塚出土人骨の血縁関係の分析」『動物考古学』第11号
- 高橋龍三郎 1991「縄文時代の葬制」『原始・古代日本の墓制』山岸良二編 同成社
- 高橋龍三郎 2001「総論」『村落と社会の考古学』高橋龍三郎・岩崎卓也編 朝倉書店
- 高橋龍三郎 2007「縄文中期の社会構造」『縄紋時代の社会考古学』安斎正人・高橋龍三郎編 同成社
- 高橋龍三郎 2007「関東地方中期の廃屋墓」『縄文時代の考古学 9 死と弔い』同成社
- 高橋龍三郎 2007「縄文社会理解のための民族誌と理論」『縄紋社会の変動を読み解く』
縄紋社会を巡るシンポジウムV
- 高橋龍三郎 2014「縄文社会の複雑化」『講座日本の考古学 4 縄文時代（下）』青木書店
- 高橋龍三郎 2016「縄文後・晩期社会におけるトーテミズムの可能性について」『古代』第138号
- 谷口康浩 2005『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 土肥 孝 2006「さいたま市東北原遺跡出土の動物形土製品について—動物形土製品への視点—」『埼玉の考古学Ⅱ』
埼玉考古学会 50 周年記念論文集
- 土井義夫 2001「定住・移動論の評価」『縄文集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 土井義夫・黒尾和久ほか 2004「特集 縄文中期の集落と居住形態」『多摩のあゆみ』第116号
たましん地域文化財団
- 新津 健 2011『猪の文化史考古編—発掘資料などからみた猪の姿（生活文化選書）』雄山閣
- 丹羽佑一 1982「縄文時代の集団構造—中期集落に於ける住居群の分析より」『考古学論考』平凡社
- 丹羽佑一 1999「縄文人の他界観」『人類史研究』第11号 人類史研究会
- 松浦誠 2013「荒川流域における縄文時代中期の小規模集落についての検討」『川の博物館紀要』第13号
- 森本岩太郎・高橋護 1995「鎌ヶ谷市根郷貝塚第一次調査出土の人骨に就いて」『鎌ヶ谷市史研究』第8号
- レヴィ＝ストロース（室淳介訳）1985『悲しき南回帰線（下）』講談社学術文庫
- 渡辺清志 1999「埼玉県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代研究会
- 渡辺清志 2016「諏訪野遺跡の調査成果について」『縄文中期の大環状集落を探る！—桶川市諏訪野遺跡を中心に—』

要旨集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

渡辺 新 1991『縄文時代集落の人口構造—千葉県権現原貝塚の研究Ⅰ』

渡辺 新 2007「集団構成」『縄文時代の考古学 10 人と社会』同成社

< 埋蔵文化財調査報告書 >

市原市文化財センター 1999『祇園原貝塚』市原市文化財センター調査報告書第 60 集

茨城県勝田市教育委員会 1982『三反田蛭塚貝塚発掘調査報告書』三反田蛭塚貝塚調査団編

桶川市教育委員会 2001『高井遺跡 第 4 次・第 5 次・第 10 次・第 11 次発掘調査報告書』

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982『清里・陣場遺跡』昭和 53 年度県営畑地帯総合土地改良事業

清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集

埼玉県遺跡調査会 1978『甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡』国道 254 号バイパス建設用地に係る埋蔵文化財発掘調査

埼玉県遺跡調査会報告書第 35 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987『神明・矢垂 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 65 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988『将監塚・古井戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 71 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989『中三谷遺跡—県警察運転免許センター関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 76 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995『日高市 向山／上原／向原 首都圏中央連絡自動車道事業関係埋蔵文化財

発掘調査報告書』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 155 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999『鴻巣市 新屋敷遺跡 D 区—大蔵省鴻巣宿舍建設工事関係埋蔵文化財調査報告

(第 1 分冊)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 194 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999『上尾市 宿北 V 遺跡 県道川越上尾線関係埋蔵文化財発掘調査報告』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 214 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000『北足立郡伊奈町 向原／相野谷遺跡 上尾都市計画事業伊奈特定土地地区画整理

事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 V』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 233 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001『北足立郡伊奈町 原遺跡 上尾都市計画事業伊奈特定土地地区画整理事業関係

埋蔵文化財発掘調査報告 VI』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 269 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006『飯能市 上町東／旭原 一般国道 299 号(飯能狭山バイパス)建設事業関係

埋蔵文化財発掘調査報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 324 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2010『桶川市 前原／大沼 一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設工事に

伴う桶川地区埋蔵文化財発掘調査報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 373 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012『毛呂山町 新田東遺跡 地方特定道路(改築)整備工事(飯能寄居線)関係

埋蔵文化財発掘調査報告(第 2 分冊)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 390 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2014『桶川市諏訪野Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第 410 集

千葉県文化財センター 1986『千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡(B 区)』

取手市教育委員会 1995『茨城県取手市 中妻貝塚発掘調査報告書』

新座市教育委員会 1976『池田遺跡発掘調査報告書』新座市埋蔵文化財調査報告第 2 集

飯能市遺跡調査会 1999『大日向遺跡・八王子遺跡』飯能日高ゴルフコース地内埋蔵文化財調査報告書

飯能市遺跡調査会 2001『落合上ノ台遺跡』医療法人くすのき会飯能ホスピタル地内埋蔵文化財調査報告書

富士見市教育委員会 1977『関沢遺跡第 2 地点』『富士見市文化財報告 X Ⅲ』文化財調査報告第 13 集

富士見市遺跡調査会 1999『勝瀬原遺跡群 勝瀬原特定土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』富士見市遺跡

調査会調査報告第 52 集

ふじみ野市教育委員会 2007『埼玉県ふじみ野市市内遺跡群 2』ふじみ野市埋蔵文化財調査報告第 2 集

ふじみ野市教育委員会 2008『埼玉県ふじみ野市市内遺跡群 3』ふじみ野市埋蔵文化財調査報告第 4 集